

『文学雑誌』と『文芸月報』

——北方左連の「関門主義」の克服をめぐって——

近藤龍哉

はじめに

- 一 『文学雑誌』の創刊
- 二 魯迅と『文学雑誌』
- 三 『文学雑誌』北方左連機関誌説（陸万美の証言）
- 四 朱正『魯迅回憶錄正誤』をめぐって
- 五 王誌之『魯迅印象記』の読み方
- 六 『文学雑誌』と『文芸月報』——「関門主義」克服から「右傾化」批判へあきがき

はじめに

「文革」の終了後、現代文学研究においても、「实事求是」のスローガンのもとに、史実の発掘に力がそそがれて『文学雑誌』と『文芸月報』

いる。三十年代の中国文壇に大きな影響力を持った左翼文学運動、とりわけ左連の研究は、背景に共産党の指導や方針があることから、従来はある枠組みのなかでのみ研究が許されてきたが、この流れのなかで、様々な角度から検討がされはじめた。北平（現在の北京）を中心とする北方での左連の活動に関する回想記の類が、続々と発表され始めたのは一九七九年のことであった。半世紀を経過しての回想記ではあるが、語られなかった部分に光があてられたこと自体たいへん有意義なことで、わたしはそれらを夢中になって読んだ。しかし、その名称をはじめとして、北平での左連の成立大会の日付もメンバーも、回想記相互の食い違いは実に大きかった。

わたしは前稿「北方左連について」（本紀要第九七冊）において、こうした記憶の食い違いが生じた原因を考えながら様々な証言を整理するなかで、事実に近い方法はないかと模索した。

大きく食い違う二つの記憶に分類できることから、成立大会は二つあったと仮定して、論をすすめて、その原因についても、「準備処問題」という党内闘争の影響と処理によるという一応の結論を提出した。その後も北方左連に関して回想記の類は出ているが、これまで、前稿を訂正するに足る新しい証言や史料は出されていない。ところで回想記に見るかぎり、初期の北方左連の活動のスタイルは、そうした二つの時期にまたがるにもかかわらず、「半箇政党」の言葉に象徴されるような先鋭なものであったという点では共通していて、その活動方針は大きく変わるものではなかった。むしろ、北方左連の方針をめぐって対立乃至は変化が起きるのは、一九三二年から三三年にかけてであることが予測される。本稿では、特にこの問題にしばって考察してみたい。尚、この時期は形式的には左連の北平分盟となっていて北平左連としてもよいのだが、前稿より継続して北方左連全体の問題を扱うという趣旨から、北方左連の名称を使うことにする。但し引用文との関係で左連又は北平左連の名称を使用する場合もある。

一九三二年、「満州国」を成立させた日本は、侵略の手をさらに熱河省と華北に拡大した。一九三三年一月、長城線の東端の山海関が落とされ、二月、熱河が総攻撃をうけて陥落し、五月にはついに長城線が突破された。北平、天津は、日本の侵略の前に緊張し、そこにあった左翼の文学運動も、いっそうその力量を問われることになった。

前稿で述べたように、北方左連の活動はおもに学生によって担われていたため、当時の学生運動とも強い関係をもったことは当然であった。抵抗か妥協か？ 学生たちは情熱を傾け、抗日運動の街頭行動へ参加し、抗日運動を弾圧する国民党のファシヨ政治に対する批判を強めていった。

一九三二から三三年は、北方の学生運動が極めて高揚した時期であった。北平大学での陶希聖の「抗日必亡」を主張する講演に反対して会場を混乱させ、二十数人が逮捕された事件もあった。¹⁾ その他、国民党の教育改革案（大学の法科、文科の募集停止）に反対してこれを撤回させたり、北平大学での学生除籍処分²⁾に反対して、沈尹默学長に抗議し、学長室を数千人の学生が取り囲んだり、保定第二師範や北平師範でストライキを決行したりしたがこれらの学生運動の中心を左連のメンバーも担った。こうした状況下で、単に学生運動にとどまらず、共産党の指導下の反帝同盟と文総の呼び掛けの下でおこなわれた、張学良の高陽などの農民暴動の鎮圧に抗議しての数千人のデモや、一九二七年に張作霖に絞首刑にされた李大釗の棺の改葬の大デモンストレーションなどにも、北方左連は重要な役割を果たしている。こうした運動は、事実上張学良の指導下にあった北平の警備が、弾圧を一層強めつつあったとはいえ、蒋介石の目が直接とどいた上海ほどではなかったという条件にも支えられていた。この条件は、三三年の夏、蒋介石によって憲兵第三団が送りこまれることによって、ほぼ終焉した。その直前、北平には新しい雑誌が次々に誕生していた。

一 『文学雑誌』の創刊

一九三三年四月、北平の西北書局から一冊の文学雑誌が創刊された。定価二角、約百二十ページの雑誌はその名を『文学雑誌』といった。いかにも平凡な名ではあるが、そこにまた編集者のひそかなねらいもあった。編集者名も文学雑誌社としかなく個人名は記されていない。創刊号をみれば小説三篇、劇二篇、評論等六篇、その他詩が数篇、グラビアには版画が配されている。目に付く作家といえは魯迅ぐらいなもので、彼は「夢を語るを聞く」というこの年の元旦に書いた雑感を寄せている。これは後に『南腔北調集』に収められた。他に、王誌之、宋之的、孫席珍、谷万川などの名がみえる。彼等はようやく一、二冊本を出したか出さないかの新進の作家にすぎない。

雑誌は巻頭に、この二月二〇日東京の築地警察署で犠牲となった日本プロレタリア作家同盟所属の作家小林多喜二を悼む張露微の詩「小林多喜二哀辞」が掲げられるなど、あきらかに左翼的傾向がみてとれるが、奥付けに付された原稿募集の注意書には、「各種の主張の異なる文章、たとえば『自由人』問題に関する反対の意見（反面意見）などを歓迎する」とあり、「文体のわかりやすい大衆化された作品（文体通俗的大衆化作品）」と反帝文芸を歓迎する」とあるのみで、無産階級革命文学を主張していないことは一つの特徴といえる。

この雑誌はいったん発行されると、出版社や編集者にとっても意外なほどの売れ行きをしめし、当初、欠損を恐れて、印刷費の一部を保証金として収めることを条件に引き受けた出版社が、自らその条件を引っ込めるほどであったという。

この雑誌が北平の読書界に歓迎された理由はいろいろ考えられるが、まずなによりも日本の華北侵攻の緊張下で、反帝国主義の主張が受け入れられたことは、言を待たない。そしてまた、『北斗』『文学月報』の停刊以後国内の左翼系の文学雑誌が空白となり、新しい雑誌の出現が待望されていたことも確かである。三十年代に書かれた王哲甫の『中国新文学運動史』のなかでは、次のようにいう。

歴史の大きな輪は絶えず前へ突き動かされ、一九三三年は再びその仕事を開始した。しかし、文壇はなんの新しい発展もない。現在の国難が日に迫り、民生が疲弊している時期には、人々は注意を外交と政治の面に多く向けてしまった。とりわけ、もともと華北文化の中心といわれた北平は、時局の影響を受け、人々はみな御侮救国の活動に忙しく、各種の文化學術の活動は、殆ど停滞したが、文学も当然例外ではなかった。雑誌の面では、左翼作家の機関誌『文学月報』はすでに停刊してしまった。これは読者にとっては失望させられることであった。新たに出た雑誌は、私の見たものでは北平の文学雑誌社が出版した『文学雑誌』があり、様々な派の文章を掲載し、決まった主張は持っていない。

この雑誌の歓迎されたわけが、この記述からもわかるであろう。この雑誌の性格について「様々な派の文章を掲載し、決まった主張を持っていない」と書いているのは、さきに引用した「注意書」の部分や、「編集後記」（一卷一期）の次の部分などによったものであろう。

本刊は全く合法的でおおっぴら（完全公開）なものである。我々数人の友人は、必ずしも意見がすべて一致しているわけではない。大衆の反対側に立たず、誠意をつくして創作するものでさえあれば、我々はできるかぎり掲載する。

「完全公開」とは、「非公然」と反対の意味である。これをわざわざ強調するのは、組織的背景をもたない有志による合法的文学雑誌の運営を印象付けることによって、あらかじめ推測される障害に備えたものと思われる。しかし、「編集後記」では同時にまた次のようにも言っているのである。

帝国主義の狂った戦争が我々をしっかりと捕えている現在、我々文学を研究するものはいかになすべきか？
我々は文学をもちいて民族の精神を鼓舞しなければならない。

ここには、民族の精神を帝国主義の戦争に抗うべく鼓舞するという明確な方針があることがみてとれるであろう。さらに「編集後記」の次の言葉にも注目しよう。

本期で我々が特別に推薦するのは、「命令……退却！ 第二の防衛線へー」という戯曲と「動揺する北平」という小説である。前者は真に重要な題材をとらえ、正確な意識で暴露した力作である。後者は北平のことを描いたものである。小資産階級のロマンチズム革命と様な走狗を生き生きと描きだしている。以前は、労働者農

民を描くことこそ革命だという極左的傾向のもとで、後者のような作品は抹殺されたのだ。現在は皆知っている。革命はこのように狭いものではなく、文学家も小資産階級を指導して、自らを清算してこそ前進できるのである。

ここには、以前の極左的な傾向（題材を労働者農民に限る）を脱皮してより広い立場にたったとの宣言があり、小資産階級を描くことに対して、乃至は小資産階級に対する態度そのものの変更が明示されている。

本雑誌の性格を検討するのは、本論のねらいでもあるので、後にもう一度たちかえることにするが、王哲甫の「様様な派の文章を掲載し、決まった主張を持っていない」という言葉をそのまま受け入れるわけにはいかないことだけ確認してさきに進もう。

『文学雑誌』は翌月の五月一日、順調に第二号を発行した。ページ数も二十頁ほど増え、執筆陣も、巻頭を鄭振鐸がかざっているほか、朱自清、張天翼とそうそうたるメンバーが並び、小説は、翻訳も含めると九篇となって、一挙に創刊号の三倍となった。

こうして順調に歩みだしたかにみえた『文学雑誌』であったが、六月は発行されず空白、七月三十一日付で、やっと第三・四期合刊号が発行された。ページ数は二百頁をこえ、小説も十三篇を数えているので、なんらかの都合で見送った三号の原稿をあわせて発行したといってもよいであろう。ただ、二号の編集後記で、「すでに編集に取り掛かった」として予告されていた文章のうち、鄭振鐸の「子夜を評す」が、本期にはなく、膨島の小説の題名が、「困」から「火災」に変わり、「資本主義第三期与文化意識」という論文の翻訳の掲載がとりやめになっている。

延期された理由はなにか、そのことと予告作品の変更とは関連があるのかどうか。それらについては、なにも語られていない。⁽²⁾というより、一、二号の巻末にあった「編集後記」が本号にはないのである。さらに執筆陣は、鄭振鐸ら著名な作家が消えたかわりに左連内の著名作家である茅盾の「雜誌辦人」と丁玲の「無題」が肩を並べ、さらに左連（上海）の若手、艾蕪や企鵝や汪金丁⁽³⁾があらたに加わっている。丁玲の「無題」は、五月に上海で国民党の特務に拉致された著者を記念するために、上海から送られて来た原稿である旨が付記されており、丁玲はすでにこの世になにももの思われていたため、「遺稿」と銘打たれている。また、関連して「文化界為營救丁潘宣言」が転載され、丁玲が拷問のなかで闘い死んでいく様を想像してうたった雪野の詩「紀念丁玲」や、丁玲の写真などがあって、一種丁玲小特集の趣がある。

残念なことに『文学雑誌』はこの期を最後として停刊してしまった。その理由については、西北書店が特務の捜査と禁止処分にあつたこと、編集者が逮捕されてしまったこと、編集者が「抗日義勇軍」に参加してしまったことなどが当事者の回想記のなかにあげられている。⁽⁴⁾ともあれ、号数でいってもわずかに四期、冊数でいえば三冊しかでなかったこの雑誌をとりあげるのは、その内容が比較的充実していることはもちろんだが、それよりもそれをささえた雑誌の編集方針に注目するからであり、そのような方針のうまれた背景とその結果を検討することにより、当時の北平での左翼の文学運動の特質を探ろうとするからである。そして、当然それは「左連」の方針にもかかわってくることであり、左連研究の糸口になればというひそかなねらいもあるのである。

二 魯迅と『文学雑誌』

創刊号に魯迅の文章が掲載されたことは、北平の小さな雑誌にとっては大きなことであつたと思われる。売れ行きがことのほかよかつた原因のひとつぐらには数えてもよいであらう。魯迅が青年達に労をおします援助を与えたことは、伝記などに描かれる魯迅像のなかに重要な位置を占めているが、『文学雑誌』に与えた援助を明らかにすることもそうした魯迅像をいっそう鮮明にすることになる。

魯迅の本雑誌に対する関心の深さと実際に与えた援助の様子は、当時、北平師範大学の国文系の学生であり、『文学雑誌』の編集者であつた王誌之に宛た魯迅の手紙に明らかである。

王誌之からの一九三二年一月一日付けの手紙を二〇日に受け取つた魯迅は、いつものことながら翌二一日には返書をしたためている。そこには「雑誌が出版されてから、寄稿します。たとえば『上海通信』のようなものを」とあり、王誌之の原稿依頼に対して、やや慎重な態度をみせながらも引き受けたことがわかる。「雑誌が出版されてから」には、雑誌の内容をみて決めようという気持があつたのか、あるいは、雑誌が実際に創刊できるのかどうかさえ危ぶんでいるのかもしれないが、一種慎重にならざるをえない気分が読み取れる。しかし、具体的に『上海通信』のようなものを「送ると約束したのは、北方での青年達の運動に、上海から遙かに声援を送ろうとする魯迅の気持ちを読み取れないであらうか。そして、「雑誌が出てから」という条件も、実際にはほとんど撤回されることになる。

年があけて、元旦に魯迅は短文を書いている。「夢を語るを聞く」である。しかし、この時は王誌之に送るつもりはなかった。一月五日、王誌之から再度懇請の手紙が来ると、魯迅は気持ちが変わり、すでに他所へ渡してしまったその原稿を取り戻し、一月九日に王誌之に手紙を添えて送っている。それには次のようにある。

去年十二月二七日の手紙はすでに受け取りました。いま、原稿を一篇お送りしますが、『文学雑誌』のために書いたものではなく、ほかのところから取り戻して転用するのです。わたしはここでも暇がなく、本も読めないのに、どうして文章を書くことなどできましょう。ですから、北平の出版物は、北平にいる作者を中心としてほしい。それでこそ発展もし、特色を持つこともできるのであって、ジャンルがいくらか不揃いなのはたいしたことありません。ほかの土地からの投稿を待っていると、出版が遅れることになりがちです。

北平での執筆陣の手薄を上海からの寄稿で埋めようというよりは、上海の有名作家の作品に頼って、北平で雑誌をやるうとする傾向を、魯迅はやりわりと警告しているように思える。しかし、編集者達の上海に頼る気持ちは、魯迅のこの手紙によっても変わることがなかったらしく、二月三日の王誌之宛手紙に、魯迅は再び次のように書かなければならなかった。

もし寄稿の大半をこの土地に期待するなら、おそらくそれは困難でしょう。なぜなら各人それぞれ雑用があつて、あちこちに執筆はできないのです。でも、北平がいましばらく人々の心が落ち着かないようでしたら、書店

が熱心になってから出してもさしつかえないと思います。

この土地とは、勿論上海のことで、王誌之が、日本の華北侵攻で緊張する北平では作家たちは落ち着いて書ける情況になく、書店も有名作家の作品がほとんど無い雑誌を出そうとはしないことを訴えたらしい様子がわかる。それに対する魯迅の返事は、一見うんざりして突き放したようにも見える。実際、その後『文学雑誌』に魯迅は寄稿をしていないのではあるが、王誌之宛の手紙に「第二期には、わたしがいくらか書かなければならないでしょうから、数日中にすこし送ります」（五月十日）ともあり、実現はしなかったが、書くつもりであったことがわかる。魯迅は前便で、本をよむ暇さえない忙しさを書いていたが、魯迅の本意は、北平独自の運動として、北平らしい特徴をもった雑誌であってほしい、そういう目的を持っていると思つたればこそ、援助しようという気持ちにもなったことをわかつてほしい、ということだったのではないだろうか。

寄稿こそしなかったものの、魯迅はその後も、『文学雑誌』やその編集者たちのためにいろいろ世話を焼いている。たとえば、三・四期合刊号の矛盾の『雑誌辨人』⁽⁵⁾などは、魯迅が取り次いだものであり、二号に載った張天翼の「私の幼年時代」も魯迅が取り次いだものである可能性が強い。さらには、『文学雑誌』のために二十元の寄付もしている。魯迅の日記をみれば、この約半年の間の、魯迅と王誌之およびもう一人の編集者谷万川との手紙のやりとりが実に頻繁におこなわれ、両者の関係が極めて密接であつたことがわかる。⁽⁶⁾

さらに、王誌之の個人に対しても大きな援助を与えている。彼から作品集の出版を相談された魯迅は、その為に貴重な時間を費やして校訂の作業をしてやっている。日記中にみえる『落花集』がそれである。こうした、個人的な援助

も含めて、魯迅と北平の左翼文学との関係が発生したのは、一九三二年一月の母の病氣見舞いを目的とした魯迅の北平ゆきであった。その際北平で行った五回の講演は「北平五講」として知られている。

三 『文学雑誌』 北方左連機関誌説（陸万美の証言）

この魯迅の北平ゆきと関連させて、『文学雑誌』が北方左連の機関誌であることを最初に述べたのは陸万美である。彼は一九五六年に人民文学出版社発行の『憶魯迅』に収められた「追記魯迅先生『北平五講』前後」のなかで、一九三二年一月の魯迅の北平ゆきに関し、新事実と思しき興味深いいくつかの事柄を書きとどめている。⁽¹⁾「文革」以前、北方左連についてかくも詳細に語ったものは、絶無といってよい。それだけに、貴重な証言ではあるのだが、その内容については、あまり重視されてこなかったように思える。

そのおもなものをあげると、まず第一に、党の責任者から聞いたこととして、魯迅北上の理由は、母の病氣見舞いを口実にしているが、実はゴリーキーの招きで、ソ同盟でひらかれる作家代表大会に参加し、その機会にしばらく滞在して療養をする予定であったこと、第二に、魯迅の北平五講は、すべて党の指導する左翼文化団体がお膳立てし、学校当局や学生会の名義で招いたものであること、第三に、魯迅の北平滞在中に、左連と文総が主催して魯迅に対する報告の会議をもったこと、などがそれぞれ具体的に語られている。総じて、北平の左連乃至は文総の組織的活動と魯迅の北平での行動を強く関連づけた発言になっている。いま、これらの点をすべて吟味する余裕はないが、『文学雑誌』と北平左連に關係する第三の問題について見てみよう。

陸万美によれば、會議は、二度行われた。最初は一月二四日、范文蘭の家で宴会の形で行われ、参加者は文総の老周、社連の張磐石、教連の劉恵之、左連の陸万美自身などであった。魯迅の為に特別に用意された浙江の料理を食べ、紹興酒を飲みながら、「この夜は、先生が一番多くしゃべった」。ところが、「魯迅先生は北平左連の活動の情況に非常に関心をしめされた」にもかかわらず、左翼運動の代表者たちは、「この日は正式な報告をせず、簡単にちよっと話ただけ」であった。陸万美はその理由を、「それは事前に文総書記の老周が『組織状況を余計に喋ってはいけない、来た目的だってまだわからんじゃないか』と言ったからだだった。おそらく、彼が来たとき、最初は組織上も秘密を守っていたのだ、それで先生の北京での公開の活動も伝わず、お膳立てもしなかったのであらう」と書いている。

しかし、二度目の會議は党の組織がお膳立てし、左翼団体が正式に魯迅の為に開いた歓迎会で、「北海后門のある先生」の家で、参加者も多く、左翼文化団体のほかCY（共青团）や反帝同盟や互済会のメンバーも参加し、陳沂、于伶、潘訓、宋之的などがいた。各団体の魯迅に対する報告の後、魯迅の文芸の闘争に重点を置いた長い発言があったことが次のように想起されている。

魯迅は文芸作家の政治活動への参加の問題をとりあげ、やはり筆をもちいるべきで、これこそが主要な戦闘方式である、と主張した。同時に、閥門主義（閉鎖主義、セクト主義のこと＝筆者）に反対する問題、プチブル出身の作家の改造問題についても話した。彼は作家は自分の最もよく知っている生活を書くべきで、できるかぎり

労働者農民に深くはいり、生産に向き合い、實際闘争の鍛練と体験を獲得しなければならぬと主張した。彼は多くの人が、労働者をゴロツキの姿に描き、口を開けば乱暴な言葉で「畜生」とどなり、そうすれば、まるで無産階級になったかのように考えているのに反対した。彼が名指しで取り上げたのが穆時英だったこと、またルンペンプロレタリアートの社会条件と政治的態度についても簡単な説明をしたのを覚えてゐる。そのほかに、組織が、かつて彼に中央蘇区と工農紅軍の勝利の戦闘を反映した長編小説を書くように提案したことがあり、材料もあつてくれ、彼も最初は非常に光栄なこと、重要な任務であると考え、努力して書きたいと思った。しかしよく考えて見ると、やはり手が付けられなかった。というのは、あるのは文字による資料だけで、自分自身はそのような闘争の生活はまるで知らず、このような偉大なテーマを歪曲するのを恐れたからだ。……略……

魯迅先生は「北平左連」の活動にたいしても具体的指示を与えてくださった。主なものをあげると関門主義の是正について、進歩を求め作風が嚴肅で真面目な老作家に対していかに団結するかについて、新しい力をいかに発見し育てるかについて、などであると記憶する。最後に、「雑誌をひとつうまくやらなければいけません」と強調した。雑誌はたしかに彼の熱情につき動かされ、特に上海に帰られてからのあいかわらぬとぎれることのない積極的援助のもとで始めたのである。これがつまり「西北書店」の名義で編集刊行した「文学什（雑）誌」である。……略……まさに先生の指示を貫徹することにより、「北平左連」は雑誌の準備を経て、関門主義の孤立傾向を是正しはじめたのである。

作家は筆を用いて闘うべきこと、作家のもっともよく知っていることを書くべきこと、は魯迅の平生の考えと離れ

てはいない。穆時英が一時左翼文壇でも脚光を浴びたものの、その赤大根ぶりを瞿秋白に指摘されたのも周知のことである。魯迅に蘇区の材料を与えて小説を書かせようとしたというエピソードは、いつごろのことであるかわからないが、左連が魯迅の役割をどのように考えていたのかがほうふつとして興味深い。もしも魯迅が一時的にせよそうした作品を書こうとしたのだとすれば、柔石を悼んで書いた「忘却のための記念」のなかで、柔石が「今後は作品の内容と形式を転換する」といったのに対して、魯迅が「それは難しいのではないか」というと、「勉強すればできます」と答えて柔石が実際に勉強を始めた時、魯迅は馮鐸がおおっているのではないか、と思い、さらに、「もしかすると、柔石のいつぞやのきっぱりした回答が、ほんとうは怠け心からの主張の弱点をビタリと言いつたからかもしれない、それで、無意識のうちに彼女に八つ当たりしているのだ」と自分を疑う場面を思い起こさずにはいられない。自分の「怠け心」と闘おうと実際そうした作品を書こうとした魯迅もまったく想像できないではない。しかし、ここではそうした問題については触れずに北方左連との関わりについての陸万美の主張の要点を整理して置くと、第一に魯迅と北平の組織（北平左連を含む）は正式に会議をもったこと、第二に、作家の活動スタイルとも関連して、北平左連に雑誌を出すことを魯迅が指示し、その後も援助したこと、そして第三に、魯迅の関門主義は正の主張がその後の北平左連の活動に影響を与えたこと、そして第四に、『文学雑誌』こそその証であるということになる。

この陸万美の証言は、最初に紹介した『文学雑誌』の概要と照らして、ひとつの有力な説明となりえているようにも見える。つまり、『文学雑誌』は北平左連の出した雑誌であり、それは左連のそれまでの関門主義的活動を打ち破るものとして企てられ、実行されたことになる。鄭振鐸や朱自清の作品が掲載されたのも、そうした方針のあらわれということになる。

四 朱正『魯迅回憶錄正誤』をめぐる

この陸万美の証言を、全体的に不信の目で退けた研究者がいる。⁽⁸⁾ その人の名は、朱正である。私は先に紹介した陸万美の証言のうち、魯迅の北平ゆきの理由に関する部分と、北平五講がすべて党乃至は関係の組織によってお膳立てされたとする説に対しては、朱正の批判に賛成である。しかし、『文学雑誌』の創刊に北方左連が関与していないとする朱正の判断には検討すべき点があるように思う。

私は、かつて『北方左連』について「陸の文章は、自らの体験したことと伝聞・推量の境目をはっきりさせながら資料として人々の前に投げ出すという態度にかけ、魯迅に対する深い尊敬と、その魯迅と深く結び付くことをもってよしとする前提から、魯迅の北平での行動を左翼運動の組織的営為の中にはめこんで理解するといった傾向がつよい」とコメントしながらも、陸万美の証言も一定の手続きを経て採用したことがある。その時、同時に朱正に対しても「朱正は陸の文章の欠点を正しく指摘しているが、同時にいくつかの点では批判の限界をも有している」とのみ述べるにとどめておいた。朱正の批判の限界というのは、方法に関してというよりは、当時（一九七九年）、左連に対する回想記の類が漸く出始めたばかりであり、朱正はそれらすべてをまだ見ていないことによるところが大きい。陸の文章にみえる上記の傾向を忌避するあまり、陸の証言をことごとく否定しようとしてかかっているふしがある。回想記の類では往々にして事実を根拠としながらも、大袈裟に語りすぎる場合がある。特に、「文革」後の名誉回復運動ともいふべき情況のなかでそうした傾向が出がちであることは、前記拙稿でも留意したことであっ

た。しかしその場合、大袈裟だからといって、書かれている事柄をまったく無視するのは、かえって事実から遠ざかることになりはしないか。その後の推移は、牽強付会に見えた陸万美の証言もあながちそうとばかりは言えないことが、明らかになりつつあるように思う。以下、『文学雑誌』に関する部分に限って、朱正の批判点を検討してみよう。

朱正が『文学雑誌』を左連がやったのではないと結論付ける根拠はおおよそつきのごとくである。

第一に、『文学雑誌』の編集者は、鲁迅日記にみえる王誌之と谷万川であり、鲁迅日記にその他の人の名は一切でてこない。

第二に、王誌之が初めて鲁迅にあったのは、王誌之が鲁迅に北平師範大学での講演を頼みにいったときであり、その時雑誌創刊の話が始まった。

第三に、その時のことを書いた王誌之の『鲁迅印象記』⁽⁹⁾は、陸万美よりも詳細に書かれ信頼できる。

第四に、王誌之はその時、鲁迅に、北平の左連が自分の著作を攻撃したことを訴えるなど、北平左連との間の意見の食い違いは大きく、そんな王誌之が主要な発起人であり主宰者である雑誌が北平左連のやったものであるはずはない。

第五に、陸万美は、『文学雑誌』が出たあと、北平に続々進歩的文学雑誌が出、それらにも鲁迅先生の一定の励ましと指導があったというが、それらの雑誌に鲁迅は何も発表していないし、日記や手紙にもそれらと鲁迅のなんらかの関係を見出す糸口はない。

第六に、同じ時期、他に『文芸月報』という雑誌があり、北平左連の方針にちかく、それこそが北平左連の機関誌であろう。

以上、朱正の判断の根拠は、おもな資料として魯迅の日記と手紙、王誌之の『魯迅印象記』に限られているが、それは当時としては仕方のないことであつた。しかし明記はされていないが、どうやら朱正は『文学雑誌』自身を見ていないらしい。これは朱正の論の弱点である。今日では、当事者たちの回想記を目にすることができるようであり、その優位な位置から朱正の判断を逐一云云してもはじまらないが、回想記は時として、かえつて問題を複雑にもしている。ここでは『文学雑誌』がいかなる雑誌であるかを、解明する手続きとして、まず朱正の論点にそつて、朱正の使つた資料を中心に作業をすすめてみたい。ただし、必要最低の限度で時に新たな回想記を使う事もある。

編集者のなかに、王誌之と谷万川がいたことは異議をはさむ余地はほとんどない。しかし、この二人以外に考えられないかどうかについては、さらに検討を加える必要がある。魯迅の日記や手紙に名前が出てくるかどうかは、あくまでも魯迅との関係を見ることに過ぎないのであつて、それ以外のものが編集に参加していた可能性があることも踏まえておく必要があるだろう。手続きとしては、まず雑誌に名前のみえる人はすべて可能性があると考えるほうがよいと思う。

朱正は魯迅関係でこの二人の名しかないというが、二月二日、王誌之宛の手紙に雪声の名が見え、これはすなわち段雪笙で、北方左連の発起人の一人で、魯迅と関係があつたことは、前稿で書いたとおりである。手紙には、「謝小姐は我々とは久しく往来がなく、雪声兄はすでに御存知と思ひますのに、手紙を転送するように頼んでくるのは、どうしてでしょう。彼女は決してこのような事をわざわざやりはしないでしょう」とある。謝とは、謝冰瑩のこと、やはり北方左連の発起人の一人である。党内闘争に関わつて除名され、北方左連からも離れて、北平を去つたことは、これも前稿で書いた。これは一月九日の王誌之宛手紙に、「冰瑩女史はちかごろ単に作風がよろしくないばかりでは

なく、彼女と左連とはとくに関係がなくなっています。ですから、わたしには替わって原稿を催促することはできません」とあるので、王誌之が魯迅に謝冰瑩からも原稿をとってほしいと頼んだ事への返事であろう。とすれば、このように左連との関係を云云する魯迅の発言はどういう立場から発せられているかおおよその見当はつく。段雪笙の名が出た事とも考えあわせれば、魯迅は王誌之の背後に左連があることを想定していたと考えるほうが自然だといえよう。因みに、段雪笙は、この当時山東の中学で教師をしていたが、第三・四期合刊号には書評を書いており、確かに『文学雑誌』との関係が証明される。

五 王誌之『魯迅印象記』の読み方

朱正は、王誌之が含沙の筆名で、一九三六年上海の金湯書店から出版した『魯迅印象記』に絶大な信頼を与える。魯迅逝去の直後に書かれただけあって、記憶は鮮明であり、描写も具体的かつ詳細で、すでに半世紀も経過した後の回想記の類よりは信頼できると考えるのは当然であろう。朱正はこの『魯迅印象記』から、王誌之と魯迅との私的な関係によって『文学雑誌』の発行がおこなわれたことを読み取り、陸万美の証言にある魯迅と北平左連の間の会議の結果『文学雑誌』が生まれたとする説を否定する。そして、その結果、陸万美は編集者の一人ではなく、『文学雑誌』は左連のやった雑誌ではないと結論するのである。とすれば、王誌之の『魯迅印象記』について、特にその北平師範での講演前後のことについて検討を加える必要があらう。

講演は、北平師範大学文芸研究社の名義で、一九三二年一月二七日の午後に行われた。講演の題目は「再び『第

三種人』を論ず」である。この講演の記録は、翌日の『世界日報』や一月一四日の『世界画報』などにあるが、正式に魯迅によって採用されず、したがって魯迅全集にもはいっていない。本来『北平五講と上海三嘘』としてまとまる筈の本がでなかったのは、師範大学の講演の記録が不十分だったことにもよるという。

王誌之が学友と初めて魯迅を訪ねたのは、一月二五日の夜である。魯迅に北平師範で講演をしてほしいと依頼に行ったのである。魯迅の二五日の日記には、「夜、師範大学代表三人が講演を依頼に来、日曜日を約す」とあり、許広平宛の手紙にも「あさっては日曜日なのですが、師範大学の学生の熱心な招待をうけて、午後講演に行く事を約束するはめになりました」とある。すでに上海へ帰る準備に入っていた魯迅には時間がなく、前日、旧知の朱自清の訪問をうけ清華大学での講演を頼まれたのにも、その場で断ったほどであった。王誌之の回想では、講演の前日ということになっているが、これは間違いである。しかし、覚束無い住所をたよりに一軒一軒訪ねまわって、魯迅の家を探し当て、予約もなしに面会を求め、挙げ句に翌日の講演を頼む傍若無人の学生とそれを受諾する魯迅のほほえましいエピソードのための脚色と考えれば納得できる。

その折り、一般の文学雑誌のことに話がおよび、王誌之が日頃の考えを述べたところ魯迅が同意した。講演がすんで、雑誌の相談をするため車で魯迅を家まで送り、そこで具体的な計画がまとまったというのが、王誌之の証言の核心であり、朱正の注目するところである。

ここから、我々の話は一般の文芸雑誌に移った。私は、ずいぶん前から心にかけてきた計画を話した。私は言った。かつての雑誌はほとんど出るとすぐ軍警にまるごと持っていかれてしまいました。まるで軍警に燃やさせ

るために出版するようなものです。これだと、どんなに激烈で、どんなに正しくても、力をむだに使うだけです。いまや、一般の読者にもっと多く彼等の読みたいものを与えようと思えば、「正しさ」のほかに、その影響に気をつかうべきです。とりわけ文芸というものは、宣言とはちがって、必ずしも大きな題目をつかまねばならぬというわけではなく、影響を深める為に技術の面でもっと成熟させて一般大衆に接近できるようにしなければなりません。文芸雑誌はできるかぎりその命を長らえさせるべきです。始めのうちは、少なくとも態度をもっと緩やかで、もっとおおらかにすべきです。そこで考えるのですが、一番いいのは公開で発表できるものをやるべきで、思想の面では単純すぎる必要はなく、徹底した反動でさえなければ許容するのです。われわれは技巧という条件を第一にすべきです。しかし、過去の情況から考えると、公開で発表できる文章や公開で発行できる雑誌だと必ず、ほとんどみな「厳しい攻撃」を受ける可能性があるものですから、真に「正しい」もの、「前進」するものは一般の読者におめえできにくくなってしまうのです。

軍警に没収されない公開の雑誌をださねばならない、その為には「正しさ」ばかり追求しないで、技術の成熟に注意し、長く続く文芸雑誌をださなければならぬ。初めのうちは、すこし態度をゆるめなければならぬ。というのが王誌之の主張であり、これに魯迅が同意したというのである。「厳しい攻撃」とは恐らく、左連の内外からの政治的思想的批判のことであろうし、陸万美のいう「閥門主義」と重なる問題である。王誌之がこうした考えをもっていたこと、それが魯迅の支持をえたことはその後の経緯からみても納得がいくことである。問題は、こうした主張を持った雑誌が北方左連の方針のうちに含まれていたのかどうか、個人的な作業であったのかどうかである。王誌之は発

行を決めた時のことを、次のように回想する。一月二七日、師範大学での魯迅の講演後、自宅まで送っていった時のことである。

雑誌を出すことに話題が移り、まず人の問題になって、我々はこうした人々を中心にしたことにした。我々と接近することの可能な人々をあれこれ検討して引き込み一緒にやることを決めた。みんなはまた書店の名をあげて、手分けしてつてを求め出版の折衝をすることを決めた。さして時間もかからずに、すべての問題をすっかり相談し終わった。

この相談に参加したのは、一体誰と誰か、そして、実際の編集は誰が担当したのか。王誌之の回想は必ずしもこの点を明らかにしていない。朱正が、編集者の名は魯迅の日記と手紙のみに頼らざるをえなかった由縁である。しかし、王誌之の回想に信を置くならば、台静農の名前を挙げておかなければならない。講演が終わって、魯迅を送るために車を呼んだ時のことである。

車が来て我々が乗り込んだとき、周りを取り囲んでいた群衆を押し分けて、一人の人がやってきた。わたしは一目見て、見たことのある人だとわかったが、すぐには名前が思い出せなかった。……略……車の中で先生の紹介を受け、その押し分けて来た人が、数年前ある友人のところであったことのある台静農であることを思い出した。「雑誌のことは、我々で一緒に話せばいいよ。」先生はわたしと台静農の顔を交互に見くらべた。

この後、魯迅の家で相談をしたのだから、当然台静農はその場にいたのである。しかし、魯迅が上海に帰ったあと、台静農はふとしたことから友人のとはつちりをうけて逮捕されてしまい、一ヶ月以上もたって漸く潔白が証明され釈放された。その時には『文学雑誌』はもうその準備にはいっていた。

魯迅は台静農逮捕の知らせを王誌之から受けると、妻子の安否をきずかった手紙を王誌之にだしており、台静農が釈放されるとその喜びを新年の慶びに託した詩を贈っている。台静農はその後、消極的になっていったらしい。五月一〇日の王誌之宛の手紙には次のように書かれている。

静農からは、久しく音信がありません。こちらから本を送ったのにも、返事がないのです。その消極の原因はわかりませんが、おそらくやはり、昨年の事のためでしょう。わたしの意見は、やはりしばらくそっとしておいて、督促しに行かないことだと思えます。疲れた人は、これ以上重荷を負わせてはいけません。そうしないと、彼はもっと疲れてしまいます。これは一時的なことで、彼はきっと回復します。

青年時代からの台静農を知りぬいた人らしい、信頼と暖かみに満ちた魯迅の言葉である。台静農と魯迅の交信はその後すぐ復活しているのである。しかしこれらのことから、台静農が『文学雑誌』に関して大きな役割を果たすことができなかったことは確かである。それではほかにどんな人物がいるか、王誌之の回想に戻ろう。王誌之は最初、友人と二人で魯迅の家を訪ねたと書いているが、魯迅の日記には、師範大学の代表三人が来訪とあり、こちらが正し

い。王誌之がなぜ二人と書いたのか。単なる記憶違いとは思えないが、その理由はわからない。そして、講演の当日、車で魯迅を迎えに行ったのも、「きのうのその学友」と一緒だったと書いている。

ところで、実はこの時の会見記が別にあるのである。一九三三年六月一日北平発行の『文芸月報』創刊号に掲載された張永年の「魯迅訪問記」がそれである。張永年は王誌之と同じ北平師範大学の学生である。一九三二年一月二八日、すなわち師範大学での講演の翌日の日付を持つこの記録は、読者からの手紙でも称賛されたほど、生き生きとその場の雰囲気伝えてる。

「時刻はすでに六時になんとなっていた。北風が砂塵を巻き上げ、街路灯もない裏通で我々は行きつ止まりつしていた」という書きだしで、番地だけを頼りに魯迅の家を探し歩く場面は、王誌之の回想とほぼ重なっている。本人の他に同行者が二人、誌之と病高と書かれている。誌之は勿論、王誌之であるが、病高は筆名であろう。実は病高も「魯迅先生訪問記」を書いていることが『文学雑誌』創刊号のなかの雑誌の広告で明らかである。当時やはり北平で発行されていた『北国月刊』の第一巻第四期である。いまのところこの雑誌は目にしていない。そして「公木伝略」によれば、病高は潘炳皋のことだという。

さて肝心の文学雑誌の話題についてはどのように書かれているか、学生との一問一答の形である。

「いま文壇はさびしすぎます。とりわけ北方はそうです。」

「北方だけではないと思います。上海でも文学の不振が騒がれています。おもな原因は文字獄です。本当のことを話そうとすると捕えられて処刑されてしまいます。けれども作家は殺し尽くすことはできません。そこで第二

の方法が書店の経営者と編集者を逮捕することなのです。ですから我々の雑誌や書籍は、どれもこれもたいへん印刷しくくなりました。しかし、あの指揮刀のもとで保護されている民族主義の文学者たちは、ものは書いているが文学といえるものなぞ見当たりません。所謂第三種人というのが、左翼の批判が厳し過ぎるという口実で筆を置いてしまいました。——本当は彼らの筆はまったくとりあげられたことなんかなかったのです。このようにいろいろな原因で、今日の文学の不振がつくられたのです。」

「北斗は多分封鎖されたのでしょうか？ 文学月報はまだ続けて出せますか？」

「北斗は出せなくなりました。けれども彼らはもう封鎖はしません。封鎖は二年前の古いやり方で、いまでは使わなくなりました。もしも雑誌がすでに大衆に信奉されている場合、封鎖は広汎な大衆の反感を引き起こします。彼らの方法はつまり編集者を捕えて殺し、書店の経営者を逮捕して、雑誌が自滅するようにしむけるのです。これはちょうど、一人の人を殺そうとしたら、首切りや銃殺でなしに、その人を監禁してなにも食べさせないのと同じです。でも文学月報は結局まあ頑張っていることができますでしょう。」

『北斗』も『文学月報』も上海で左連がやっていた公然（公開）の雑誌である。左連五烈士の事件にみられるような苛酷な弾圧下で、非合法活動を余儀無くされた左連は一時秘密裏に機関誌を発行したが、その後、編集者を明記し書店を経て発行する公然の雑誌を出すようになっていた。ここで魯迅の口から、国民党政府の新たなやり方で雑誌や書籍の発行が難しくなったという現実の認識が語られたことは確かであり、こうした会話が北方の文学運動への助言と援助として受け取られた可能性がないとは言えないが、王誌之の回想のように、初対面の彼らの雑誌の計画に直ち

に魯迅が参画していった様子はここにはみあたらない。しかし、具体的な話はこの日ではなく、魯迅を送って行った日に行われたとすれば、こちらも見えておかなければ片手落ちになる。残念ながら、当時はその日について何も書かれていないようである。しかし、今回の新史料・新証言採集の高まりのなかで、この日魯迅を送って行ったという人が現れている。かつて、これも北平師範大学の国文系の学生であった李文保である。彼はその時の自分の役割について次のように語っている。⁽¹¹⁾

講演会の主催者は「左翼作家連盟北平分盟」である。各進歩団体が活動を分担した。私は「一九三二読書会」代表の身分でこの接待活動に参加した。会を開く準備の活動は、おもに左連のメンバーによって具体的に整えられた。たとえば、魯迅の安全を維持するとか、壁新聞を貼り出すとか、会場を設営するなどである。中文系の同級生である王誌之と私が表面にたつて、魯迅を接待し、会を主催した。

講演会的主催者が左連であったと言い切っているが、これは今日からの判断であるかもしれない。準備の活動がおもに左連のメンバーによって行われたとあるのは、そのとおりであろう。「一九三二読書会」については調べがっていない。さて、李文保は、魯迅と一緒に車に乗り込んだ時のことを次のように回想している。

台静農が右側から近付いてきて、魯迅に乗車をすすめた。私は台静農と王誌之のあとから一緒に車に乗り、魯迅の左に座った。……中略……車が新華街を通ったとき、私は尋ねた。「先生は左連ですか」。魯迅は軽くうなず

くと「そうです」といって、あとはなにもいわなかった。私もそれきり尋ねなかった。車が西単牌樓をすぎたとき、私は尋ねた。「先生、無産階級文学とはなんですか。プロ文学とはどういう意味ですか」。先生は少し考えて言った。「農工大衆に顔を向けた革命文学です」。私はまた尋ねた。「工農大衆でしょう」。魯迅は私の顔をちょっと見ると微笑みながら言った。「そのとおり、工農大衆です」。

魯迅の当日の講演の題目は、先にも述べたとおり「再び第三種人を論ず」であった。その講演を聞いた後で、しかも接待者の一人が、「先生は左連ですか」と尋ねたのである。さらに「農工大衆」を聞きとがめて、「工農大衆」という用語に訂正させたのである。当人も回想記のなかでは、「實際は、左連の成立の時、魯迅は連合戦線の目的は『すべて工農大衆にある』といったことがある。このとき、私が、言葉尻りをとらえたのは、本当に幼稚で笑うべきことであった。魯迅先生は当時マルクス主義を把握しており、ソ区の農民革命に対して、かなりの理解をしていた。彼が『農工に顔を向ける』といったのは、当然現実的意味を含んでいたのだ」と反省している。しかしこの正直に回想されたエピソードには、当時の左翼の学生活動家の、魯迅に対する態度が凝縮されて表現されているように思う。一方で、左翼に同情的な大作家に対する敬愛の気持ちを持ちながら、一方では自分達こそ眞の革命家であるといった気負いを隠しきれなかったということだろう。

さて、魯迅の家についてから、「魯迅は私達をそこに腰掛けさせ、五十歳前後の婦人が二皿のアメを運んで来て茶机の上に置き、四つの茶碗にお茶をつぐとまた東の部屋に戻って行った。魯迅は台静農と小声で言葉を交わしていた。王誌之も時折言葉をはさんだ。私はただアメを食べながら、彼らの話を聞いていた。話題は左連に関わる事にも

及び、北平と上海の近況についても語り合った。手持ち無沙汰のまま部屋の中を眺め回し、「どれほど腰を落ち着けずに、誌之と私は立ち上がって暇を告げた」のである。「四つの茶碗」であるからには、魯迅、台静農、王誌之と李文保の外には誰もいなかったのであり、ここで雑誌の話が行われたとすれば、どうやら聞き手に過ぎなかったらしい李文保を除いた三人の簡単なやりとりを過ぎず、王誌之の言うように、「決定」したり「分担」したりといったものではなかったのではないだろうか。

ところで、王誌之と魯迅の間で『文学雑誌』の創刊が決まったとする朱正の説は、王誌之が北平の左連と対立した意見をもっていたという仮定と相まって、『文学雑誌』が左連の発行したものではないという結論へと導かれていた。左連との対立は、最初の魯迅訪問の時の王誌之の次の言葉から導きだされている。

「周先生は今どんな団体に参加なさっていますか。」私はなぜかこう口に出してしまってから、突然こういう質問をしたのはなはだぶしつけたと思った。ところが周先生は少しもはばかりことなく、顔を起こして、私を見つめながら傲然とずばりと答えられた。／「左連です。」／私はカバンのなかから自分の戯曲集『革命の前夜』をとりだしてお渡しした。／「最近、北平の×連は彼らの雑誌でこれを罵っています。私が熊仏西、梅蘭芳たちに焼きもちを焼いている、彼らがもう大衆をだませなくなったので、こんどは、私がとって代わろうとしているのです。私のことを新しい走狗だといって罵るんです。つまり、まるで彼らの唯一の仇敵であるとなしているみたいです。そうしているうちに、こんど当局に発禁にされてしまて……」／周先生はその本を開くと笑いだした。／「私は戯曲は門外漢だが、情況がそうなのはわかりますよ、上海でも同じです。しかし、今では、

もう変わりました。なにかにつけて怖い顔をしてみせるのは、すこしも役にたちません。ある人たちには、いくら間違っているのは避けられないけれども、よい傾向さえあれば、我々は善意で批判し、指導を強めるべきです。一番悪いのは、なにかにつけて攻撃することです。」／「彼らは批評の任務を考えたこともなければ、指導を考えたこともないんです。」私はついカッとしてしまった。「彼らはあらかじめ固定したモデルを決めてしまつて、作品をあてはめ、完全にあえばよし、あわねば、攻撃するんです。彼らの本心は批評にあるのではなく、他人の欠点をほじくり出して、自分が前進しており正しいことを顯示することにあるんです。」

魯迅が「左連」に入っていたかどうかはここでも質問されている。当時の北平の左翼の魯迅評価の一端がかいま見える。陸万美の証言にあった北平文総の書記が魯迅に組織のことを話さないようあらかじめ注意を与えたことと同じ平面上のことであろう。王誌之の戯曲集『革命の前夜』は、一九二九年に発行されたもので、王誌之においては旧作に属する。⁽¹²⁾「×連」を左連と読むのは順当であろう。八一年改定版では、「左連」とされている。そこで朱正はこの叙述に、北平の左連と王誌之の対立を見るのである。左連の機関誌に王誌之の旧作を攻撃する文章が載ったかどうか直ちに調査することはできないが、ありうることはある。⁽¹³⁾しかし、だからといってただちに王誌之は「左連」と対立していたと考えるのは早計である。確かに、この文面はそう読めなくもないし、そう読ませようとしていると言つてよいかもしれない。結論を示す前に、一九三六年、『魯迅印象記』執筆当時の王誌之の立場を確認しておこう。

王誌之は、『魯迅印象記』のなかに魯迅からの手紙を多数引用しているが、これらの手紙の冒頭、本来王誌之の名

のあるべきところは、すべて削りつつているか、または「××兄」のように伏せ字にしている。また、この本の著者が含沙となっているのもほとんど同じ理由から、つまり、三三年北平で活躍した王誌之の名を隠さねばならなかったからである。文中の肝心なところで、固有名詞などがぼかされているのも、やはり同じ理由からであろう。三十年代左連の活動は殆ど地下活動に近く、魯迅との関係も含め、それらを公表することが当時いかに危険であったかは、少し考えればわかることだが、王誌之についても例外ではない。

もう一つ、王誌之は三三年に活動していた時とは、すでに立場がかわっていた可能性がある。それは、この『魯迅印象記』のなかですでに暗示されていることである。

『文学雑誌』第二期が出版されてから、北平の局面に唐沽協定というものが生まれ、「危」から「安」に変わり、一般の人の注意はその時察哈爾で新たに起こった社会運動に向けられた。多くの友人はそうした「安」の北平にいて一層大きな不安を感じ、その運動について張家口へとおしよせた。私も張家口の付近まで行き、数か月走り回った。その結果満腔の失望と体じゅうの病氣を得て帰って来た。過去の友人達は、夢にも思わないほどの変化をおこし、顔を合わせるのがまずいのは勿論のこと、実際いささかの警戒心を持たざるを得なかった。私のような人間は、他人から、昨日は「正しくない」と罵られたかと思うと、今日は「反動分子」と指さされるようになっていくものとみえる。というのも、このような時世には、情勢の変わるのはとても速く、それよりもっと変わり身の速い人もいて、混乱のなかでこうした人と付合うのは実際とても面倒な事で、そこで私には唯離れる一途しかなかった。

つまり、理由はどうであれ、王誌之はそれまでの戦列を離れたのである。

朱正の推論を追って少し回り道をしすぎてしまった。というのは、王誌之は今日健在であり、現在の立場から、再び當時を回想した文章を書いているからである。⁽¹⁴⁾

それによれば、一九三一年以来、彼は北方左連のメンバーであった。

一九三一年、妻の黄遠征の紹介で潘訓（潘漢華）と識り、思想上の疑問がとけて左連に入り、師範大学の小組で活動した。三二年、『北方文芸』を創刊、公式的概念的小説を書く。『北方文芸』は『北方文学』と改名するが、どちらも本屋の店先に並ぶよりはやく特務に没収されて、読者の目には触れにくかった。「三二年、魯迅が北平に来て、我々はこういった情況について話し、反動派を扱う策略の問題に目が及び、元来のタブーを破り、外に開放し、寄稿者の枠を拡大し、外に公然と発行し、雑誌のやり方をすこしあいまいにし、混じりけをもたせた。」というのである。

そしてさらに彼は、魯迅と会ったすこし後には、入党を許された人物でもあった。魯迅が北平を離れてまもなく、北平大学の講演会で北平市の治安当局に逮捕されたが、翌年春釈放をかちとり、獄中での態度が認められて、共産党に入党、文総から派遣されて張家口に行き、馮玉祥總司令の察綏民衆抗日同盟軍の吉鴻昌將軍の部隊で政治部の活動にあたる。秋、吉鴻昌の部隊が全滅してしまい、北平に逃げかえってからは、名前も王思遠と変え、魯迅との手紙のやりとりを除いてはほぼ外部との連絡を絶ち、しばらく身を隠した。その後三五年には、天津で馮玉祥の援助で新文芸書店をやり、三六年には、南京で馮玉祥に頼って、執筆生活が続けていたという。⁽¹⁵⁾馮玉祥がたえず共産党の統一戦線の相手であったことは事実であるが、この時は一時的にもせよ蔣介石と妥協を余儀無くされていた時であり、王誌

之が共産党と一線を画していたことは明白である。

直接このことが影響したのかどうかは、なんともいえないが、こうした「生活」のために、魯迅と王誌之の間にも不信が生まれたらしい。王誌之と魯迅の交際は、「魯迅日記」などでみるかぎり三五年九月までは親密であるが、魯迅は九月一九日付けの手紙で『文史』への寄稿を断った後、九月二七日には、王誌之から送られてきた手紙と原稿をそのまま送り返し、以後両者の文通は途絶えている。約半年後の三六年の三月一二日に王誌之は内山書店を尋ねて、名刺に一筆書き残している。九月になって王誌之はまた手紙と原稿を魯迅に送っているが、魯迅は今度は返事をつけて送り返し、一週間後に王誌之がまた手紙と原稿を魯迅に送り付け、今度は魯迅はそのままにしている。このやりとりには、なにやら尋常ならざるものを感じる。魯迅の死後、王誌之は許広平におくやみの手紙をだしているが、そのなかで、「北平を離れてから、生活のために彼に手紙を書きませんでした。二度上海へ行き内山書店を尋ねましたがお会いできませんでした。最後の時は、手紙を書き、私の近況を説明し、二部の原稿（内容は省略——筆者）をお送りしました。教えを乞うためもありましたが、私の最近の真実の有様を証明するためでもありました。もしも貴女があの手紙をお読みになっていれば、私が彼の赴報を得てどんなに衝撃を受けたかわかっていただけのはずです。私は二度お会いできませんでした。いつか必ずお会いできる機会があるとおもっていましたのに……」と書き、末尾に「私は彼が絶対に私の誠意を拒絶しないと信じています」と結んでいる。魯迅との間に絶交の状態があったことはまず間違いない。そして『魯迅印象記』はこうした状態で、魯迅との親密なりし頃を回想し、「押さえることのできない悲憤を吐き出す」ことだったのである。

現在本人の口から、左連に参加していたことが明らかにされ、魯迅との話し合いの内容についても、自らの左連内

部の活動、すなわち雑誌の編集の経験から得た結論を確認し実行するものとして、『文学雑誌』の創刊につながっていたことが明らかになったいま、なぜ一九三六年の回想記にかかずりあうのか。現在のおびただしい数の回想記を取り扱うべき姿勢を確認し、それを同時に過去の回想記を読む際にも貫きたいと思うからである。何度も言うようだが、現在は丁度逆である。「文革」後に「回想記」を書く場合は、党との関係や組織との関連を出来るだけ強調したいと言う心理が働いているように思われる。一つは、制約はあるにしても、今日ほど、党をはじめとして、組織活動の内容が明るみに出たことはない。この際、これまで書けなかったことを書いておきたいという心理が働いていること。第二に、回想が名譽回復や業績の顕彰という役割を担って行われていること。これらの理由から、どうしてもこうした傾向が生じがちである。そこで、事実を見極めようとする研究姿勢をもった人々から、朱正氏のような反発が生まれることはよく理解出来、また賛成でもあるが、その逆の事情に対して配慮がすこし足りないように思われる。

つまり、王誌之が上記の引用文のなかで、『文学雑誌』の編集を左連の活動のなかに位置付けようとしないうのは、そうみせてはならぬところで、この雑誌を行い、そうみせては危ないところで、もしくはそう見せたくない位置から『魯迅印象記』を書いたからなのである。

しかし、だからといって王誌之の当時の回想が、黒を白と言いくるめるようなものであったとは思わない。自分の内ではこういう表現で合理化できるような状況をやはり反映しているのである。自分が左連の雑誌から攻撃をうけたことはあっただろうし、左連のなかでの意見の食い違い、或いは対立に近いものさえあったのではないか、というのが私の推測である。

六 『文学雑誌』と『文芸月報』——「閥門主義」克服から「右傾化」批判へ

さて、王誌之が左連のメンバーであり、『文学雑誌』の中心的な編集者であれば、『文学雑誌』は左連の機関誌である。とただちにいえるだろうか。ここで同じ時期に北平で出た『文芸月報』という雑誌との関係が問題となる。

『文芸月報』は、一九三三年六月一日、つまり『文学雑誌』の発行から遅れること僅か一ヶ月半、同じく北平で創刊された。編集者は文芸月報社で個人名はなく、発行は立達書局である。装丁は上海の『文学月報』にそっくりで、内容も明らかに左連との関係を思わせる。

第一期の「編集後記」では次のように書いている。

汎山の困難、障害を経て、現在この雑誌はついに大衆と顔をあわせた。……中略……北斗と文学月報があいついで停刊してから、文壇はとくに寂しくなってしまった。とりわけ北平では、満天に砂塵が飛び、太陽を見るのも難しいことだが、満足のいく文芸雑誌を探し当てるのはもっと難しい。この時、我々は皆が読み通すことのできる文芸雑誌を出す事を計画したのである。……中略……文芸月報を計画した時、我々はこの雑誌を中心にして、読者に作者や編集者と繋がりをもたせることを決定した。その上、我々は読者がいつまでも読者のままでいることを願わない。我々は読者が同時に作者や編者でもあることを願う。だから我々は特別に読者の投稿を歓迎するのである。

『北斗』『文学月報』の後を受け継ぐものという自負を持ち、読者との繋がりを重視する方針を明確に示している。この点について読者からの手紙に「賛成ではあるが、では具体的にどうするか」という質問が見えるが、掲載された日本の『プロレタリア文学』三三年一月号の「通信員運動と報告文学の問題」（山田清三郎）の里正による翻訳は、すでに一つの解答なのである。

さて、問題はこの二つの雑誌はいったんどういう関係にあるのかである。朱正が『文学雑誌』は左連の運営した雑誌ではないとしたのは、王誌之の回想に加えて、この雑誌と競合することになってしまったからである。確かに雑誌の発行が極めて困難な時期に、ジャンルが違えばともかく、非常によく似た大型雑誌を二つも出すということは常識的には考えにくい。確かに両雑誌はそれぞれに相互の広告を毎号載せている。それにわずかではあるが、両方の雑誌に執筆しているものもある。しかし、両雑誌の間に些かの対立意識を探すこともできるのである。

第二期に掲載された読者からの三通の手紙で、第一期に対する反響がわかる。そのうちの一通は『文学雑誌』との比較をして、「これは『文学雑誌』につづいて世に出た定期的文芸雑誌であり、前者と比べて一層有力に思われる文芸雑誌である。」全体から言って『文芸月報』の創刊号一冊は二期分の『文学雑誌』よりも、質的に充実しており、ここには『文学雑誌』のように、前号の続き、続きの続き、続きの続きといった文章はない」としている。『文学雑誌』に掲載された王誌之と宋之的の小説が未完のまま終わったことは事実であるが、「質的充実」とはやはりその思想性の面から、『文芸月報』の肩を持って言ったものと見るべきであらう。別の読者は「彼女（『文芸月報』のこと＝筆者）は沢山の活力を携えてやって来て、我々を十分に興奮させた。このような興奮が私の生命力を急激に強

めたことは明らかだ」と言い、「結論を言えば、『文芸月報』には一つの突撃隊中の一番の『芸術中隊』になつてくれるよう希望する」と勇ましい。

二つの雑誌については王誌之は『魯迅印象記』のなかでつぎのように語っている。

その時、我々は別の友人たちが別の雑誌を準備中で、名前を『文芸月報』と決めたと聞いた。ボリユームも内容も我々とそっくりだが、ただ彼らは我々のように慎重に手堅く（原文は謹慎、老到＝筆者）やりたいとは思わなかった。彼らの特徴は「革命的 Romantic」であつた。

二つの雑誌がほぼ時を同じくして準備にかつたというのは事実であらう。一ヶ月早く出版された『文学雑誌』の創刊号に『文芸月報』の広告がすでに掲載されているのも、本来同じ時期に発行される予定だったことを物語っている。「謹慎、老到」や「革命的 Romantic」とは具体的に一体どういうことを指しているのか。「ボリユーム」も内容もそっくりの雑誌の違いをみてみよう。「公開」ということでは、『文芸月報』も「公開」である。秘密出版ではなく、れっきとした書店が発行しているのである。左連の機関誌であると明示もしていないし、無産階級革命文学の主張もない。しかし、一見して左連の合法的機関誌であることはわかる。それに対して、『文学雑誌』はあくまでも、文学愛好者による雑誌の線を守ろうとしている。たとえば、『文学雑誌』第二期は編集後記に次のようなことを書いている。

たくさんの方の極めて貴重な意見のなかで、比較的多かった意見は、激励先生が庸報の「另外一頁」に発表した文章のごときであるが、我々は大分は誠意をもって受け入れさせてもらうのだが、そのほかにやはりここで釈明させていただかなければならない部分がある。それは、激励先生は他の大勢の読者同様、本誌に対する希望が大き過ぎるのである。激励先生は、始めに目下の文学の任務を提起し、しかる後本誌がこの任務に対してどの程度完成しているかを検討しているが、これは我々をことのほか戸惑わせるのである。同人たちはもとと文学趣味があるものたちに過ぎず、当面の寂寞を打破するために、この雑誌を出したに過ぎないのである。まことに「任務」とか「運動」とかは語るのも恥ずかしいのだ。我々は激励先生及び激励先生と同じ気持ちを持つ友人達が、普通の目で我々を見てくれるといいと思う。

これが、編集者の本心か、それともカモフラージュかの詮索は意味がない。なぜならこれがこの雑誌の戦略であり、雑誌の性格の自己規定であるからだ。しかし、商業雑誌の発達した今日の日本ならともかく、当時の北平にあってそうしたやり方が、右にも左にも通用したかどうかは、別の問題であらう。たとえば、同じ編集後記に「このほか、本誌に対して上述したのとは全く異なる見方もある。北平のある小さな文芸誌は、我々に向かって『ルール』の矢を放ってきた。突然耳にした時はいささか驚いた。後で聞けば、これは北平で専らデマを事とする某系列のやっているものだそうなので、気にしないことにした」とあるが、まずは右からは見抜かれていたのであらう。

本心ということを言えば、同じ第二期の編集後記の「発表しなかった投稿は、大半は以下の二つの原因による。一つは『スローガン』になり過ぎていること。特に詩である。二つは、多くの作家が題材を単に人間性でしか処理して

いないこと」とする部分は本心であろう。王誌之のいう「正しき」よりも「熟したもの」を重視する態度が明白である。

しかし、より違いのはっきりしているのは、「第三種人」問題とも関連して「関門主義」の問題である。『文学雑誌』の創刊号に載った谷万川「文学上の腐敗せる自由主義を論ず——蘇汶の『干涉主義を論ず』に反対する——」では、前半で表題のような批判をしているのに、後半ではこの論争を次のように総括する。

今度の論争について、我々が大変嬉しく思うのは、双方の態度がとても率直誠実なことで、過去のあらゆる論争では見られなかった。しかしこれは、双方とも真理の為に闘っているからであり、事実上、無産階級或いは現在無産階級に向かって進みつつあるものだけが、真っ直ぐに真理に顔を向け、真理の為に闘うことができるのである。

「双方」の相手はもちろん第三種人であり、おたがい真理の為に闘っていると持ち上げているわけである。前半との食い違いはどこからくるのだろうか。谷万川によれば、この文章はもとと一二月末に書いて未完のままになっていた。山海関事変のあと、師範大学の三十二人の学友が逮捕される事件が起こり、しつこくつきまとうごろつきやスパイを逃れて田舎に行き、ふたたび北平に戻って見ると「新興文学の理論の面でも急速に展開しており、自分が言いたいと思っていたことがすでにほかの人によってより木目細かく言われてしまっていた」が旧稿をそのまま使い、後半にこうした文章をつけたというのである。谷万川の文章の末尾には四月三日の日付があるから、この三ヶ月の間

に、急速に展開したと考えられる理論的成果を彼が目にしたということになる。それはいったいなか、つぎを読めばわかるであろう。

「自由人」に対する態度は、我々は、世界文化第二期の「文芸上の閥門主義」の意見に大賛成である。資本主義世界が動揺崩壊するなかで、たくさんのプチブルジョアジーが、経済的に日増しに追い詰められており、無産階級の陣営に向かっている。左翼文芸戦線にいるものは、けっしてこれを千里の外に遠ざけてはならない。それは事実上敵を助けるものだ。一部の大衆を自分達のほうに闘い取することは、目下の最も重要な任務のひとつである。しかし「閥門主義を打ち破る」のは、単に理論のみならず、より重要なのは実行である。過去のすべての行動における「左」の傾向を完全にたすには、何編かの文章を書くよりずっと多くの努力が必要であろう。

『世界文化』第二期に載った「文芸上の閥門主義」とはなにか。いうまでもなく、張聞天が、初め歌特の筆名で、上海で発行されていた中共中央委員会機関誌『闘争』第三十期（一九三二、一一、三）に発表した「文芸戦線上の閥門主義」のことである。⁽¹⁷⁾ 谷万川はおそらくこれは読んでいない。少なくとも三二年中には読めなかった。張聞天のこの文章は、その後三三年一月一五日発行の『世界文化』第二期に転載されたが、そのときには筆名は科徳となった。⁽¹⁸⁾ 谷万川が読んだのはこれである。しかし、「自由人に対する態度は」というのはおかしい。第三種人とすべきである。もしこれがまちがいでないとしたら、谷万川は自由人も第三種人も区別していいのである。少なくとも、自由人のなかに、マルクス主義の用語を操りはするが、「超階級的観点で芸術を批判する」「資産階級的自由主義者」と歌特

によっても批判されている胡秋原を射程にいられているとはいいたい。つまり谷万川は、一般的なプチブルジョア作家に対する扱いかたとして科徳の論文を読み、受け入れたことを、そしてそれは以前から自分も考えていたことであると表明しているのである。

このような理解は一人谷万川だけのものではなかったらしい。次の老馬の「楊邨人の革命文学の旗を暴露する」は、楊邨人をテーマとしたものだが、そのなかでも第三種人を次のように評価するのである。

「第三種人」は、一種の無産階級革命に賛同し、作家の自由を要求し、中立的地位を保持したい人であるが、この見解はもちろん誤りである。二つの階級が鋭く対立している時、中立的地位は不可能であり、作家の絶対的自由は無駄話にすぎない。「第三種人」は、見込みがない。しかし、一般的にいえば、彼等はやはりプチブルジョアジの革命文学者であり、彼等の文学は革命全体にとって役にたつといえる。しかし、楊邨人先生の掲げた小資産階級革命文学は、これらの無産階級革命に賛同する「第三種人」の文学ではなく、「第三種人」の看板を悪質にも利用したにすぎない。

ここで、第三種人論を検討する余裕はすでになくなってしまったが、『世界文化』第二期の論文をこのように読んだ人々がいたということは記憶されてよい。そして、かれらは第三種人を蘇汶や施蟄存の姿や活動をとおして具体的に見ているのでは無く、北方左連の活動のなかで、従来切り捨ててしまったもの、そして切り捨てはしたが気になっていた部分を拾いあげねばならぬという気持ちを、この論文およびこの論文がもたらしたある情況を活用することに

よって実践しようとしたのである。

では、その実践とはいかなるものであったか。まず、『文学雑誌』がそのテコとされたことはいうまでもない。そしてまず第一に、文壇に影響力をもつ既成作家との連携をはかることであり、若手の作家に対する研究再評価であった。陸万美は回想してつぎのように言う。⁽¹⁹⁾

まもなく、我々は鄭振鐸、朱自清先生を北海五龍亭におよびして話し合いをした。それにまた、鐘敬文先生（民俗学の専門家）に対して一歩一歩接触することを決定し、工作を進めた。さらにそれまで『新月派』の若手とみなされてきた何其芳、李広田らの同志に対しても、調査研究を深め、再評価し、工作を強めようとした。当時極めて思ひ上がっていた李張之、徐突微に対してさえも、我々は目を向け真剣に分析し、接触し理解しはじめていた。

この文芸茶会は、陸万美の回想では三三年の三月頃のことになる。このことについては王誌之により具体的な回想がある。⁽²⁰⁾鄭振鐸、朱自清が『文学雑誌』に登場したのは、明らかにこうした試みの成果である。この点については、魯迅の王誌之宛の手紙（五月一〇日）にも次のように書かれている。

鄭朱らが一緒にやることは、非常によろしい。我々の態度はやはりすこしゆるめたほうがよいと思います。実際べつに大きな援助はしてくれなくても、悪意はいっていない人たちがいますが、目下のところは決して敵で

はなく、言葉をあらげ、きつい顔をして、人を千里の外に追いやるなら、それは我々の損失です。やはりさしあたってはあまりにも完全無欠を求め過ぎてはいけません。というのは、きびしく完全無欠を求めると、何人かの人はすぐに遠くへ逃げてしまつて、ちょっとよくないのがすぐに迎合して来て、心にもないことを言います。これでは、よい文章ができるはずはなく、しかも、偽りの友人ということになります。

こうして『文学雑誌』第二期は、この雑誌が進むべき道筋をはっきりとみさだめていたのである。さらにこうした著名な作家だけでなく周辺の若手の人々に目をむけたことは、例えば何其芳や李広田がその後たどった道筋とまったく無縁とはいえないだろう。徐突微は、その後の複雑な経歴はともかく、左連の中樞を支えるまでになるのである。こうした努力とは裏腹に、同じ左連の方針であったとはおもえぬほどに、『文芸月報』は過激である。第三種人の問題にしても、『文芸月報』はほぼ一様に冷たく突き放しているようにみえる。たとえば、創刊号には金丁の「第三種人の出路はどこか」という第三種人批判の論文が載っているが、これに対する「読者通信」（第二期）は三者三様ながら、方向性において一致している。読者とはいってもみな一家言をもった『文芸月報』びいきの批評家らしいことを付け加えておこう。

金丁の「第三種人の出路はどこにあるか」は、文章はいい。しかし第三種人の討論はもう過ぎ去ったとは言えないにしても、事実上相当の結論が出ているのである。この文章はつまるところそれほど大切ではない。（蕭湘）
張英白訳「文学的党派性」と金丁作「第三種人の出路はどこか」はどちらも注目に値する文章であり、『現代』

五月号の周起応の「文学の真実性」とあわせよむとよい。これは文学上のいくつかの重要な論争の問題に解答している。（欧倫）

「第三種人、自由人」ではほとんど半年あまり費やして論争してきた今日、我々は明確かつ厳正に、イリイッチの文学理論を紹介しなければならない。「文学の党派性」を訳したのはやはり最も価値あることである。我々文学を武器とすることをもって論じるものは、機械的に文学が完全に物質生活の再現であると断定することはできないが、蘇汶、胡秋原らのように文学を超現実的なもの、無階級的なものとはけっしてしない。もちろん我々は彼等のこの形を変えたやり口が彼等の階級性に忠実で、彼等の社会民主主義派に忠実で（洛揚はこのように彼を罵っているが、私はすこしも辛辣とは思わない）、第三者の位置を緩衝として階級対立を軟化させることに對しては、本當にその時その場で、彼を暴露すべきであり、「第三種人の出路はどこか」の發表は遅過ぎると思わない。しかし、いくらか遺憾に思われるのは金丁君の論点が以前の批判よりどれほども充実し、正確になつていないことである。（李濤）

編集者が概ねこの読者通信と同意見であることは、編集後記の様子で察せられる。ここで称賛されている「文学の党派性」とは、川口浩の『プロレタリア文学概論』の第三章の翻訳である。訳者は張英白である。川口浩のものは、他に「文学批評上のいくつかの問題」（第二号、里正訳）が同書第七章「文学批評の諸問題」の、「資本主義下の大衆文学」（第三号里正訳）が同書第二章「資本主義下におけるプロレタリア文学」の翻訳である。⁽²⁾また掲載された広告によれば、「文芸月報叢書之一」として「川口浩著『新興文学概論』（里正訳）」が予告されているから、張英白は里

正と同一人物であろう。「イリイチの新段階における、文学理論発展の成果であり、かつ二つの戦線にたつて機械論と新観念論に痛快な打撃を与える。」(トロツキー主義、ブレハーノフ主義、メーリング主義、ルナチャルスキー主義などの誤りを暴露する)という宣伝文句でもわかるとおり、文学のレーニンの段階を標榜する理論である。『文学雑誌』(第三・四期合刊)が、ソ連でのラップ批判や「社会主義リアリズム」に関心を寄せ、キルポーチンとグロンスキーの全ソ作家同盟組織委員会での発言を引いて初めて「社会主義リアリズム」というスローガンを紹介した上田進の「ソヴェート文学の近状」(『プロレタリア文学』三三年二月号)を翻訳しているのと対照的である。

ところで、訳者の里正は『文芸月報』には毎号日本のプロレタリア文学の理論を翻訳しており、張英白とあわせる²⁰と、三号で五篇も日本語の論文を訳していることになる。この精力的な里正とは李正文の筆名である。李正文は当時、北平社連の指導者の一人であった。李正文自身の回想によれば、「一九三二年元旦、私は北方左連に参加した。同年秋、私は左連から社連に転じた。相前後して私を指導したのは張磐石、謝樹椿、李忠信などであった。まもなく、私は北平社連の執行委員に選ばれ、研究部の責任者つまり研究部長となった」のであった。²¹その社連の研究部長が、左連の機関誌にかくも精力的に翻訳を掲載しているのである。李正文自身が「われわれ社連は、左連が相次いで出した『文学雑誌』『文芸月報』に参加した。どの期にも、わたしが日本の『プロレタリア文学』雑誌から翻訳した文章が発表されている」と言う。しかし、『文学雑誌』にはそれらしきものを確認することができない。だが『文芸月報』については、どうやら李正文は翻訳をしただけではなさそうである。当時、文総の常任委員で発行部の責任者をしていた陳北鷗の回想では、『文芸月報』の編集に責任をもったものは李正文、張磐石と自分だ」といっており、²²中心的メンバーだったのである。そして、張磐石もやはり、文総の常任委員で宣伝部の責任者であり、左連のメンバー

は陳北鷗だけである。といっても彼も當時はすでに文総の常任委員だったのであるが……。つまり、文総が直接乗り出す形で、この『文芸月報』は発行されていたのである。

『文芸月報』第三期には前衛という署名で『文芸月報』第二期——私の意見」という文章が、『庸報』八月八日と九日の「另外一頁」から転載されている。後半は落丁で読めないが、「編集後記」によれば、翻訳の原文にあたるなど厳しくかつ懇切な批評をしているようである。この批評の冒頭、前衛氏は『文芸月報』を『文学雑誌』を含めた他の雑誌と比較して次のように言う。

おそらく『文芸月報』がすでに中国文壇に指導的地位を勝ち取り、広汎な読者大衆の心を掴んでしまったことを否定するものはいまい。まさに彼女が少壮の作家の集団的産物であるがゆえに、まさに彼女が統一戦線上を整った歩調で前に向かって邁進するものであるが故に、各階級の作家が一つに混じりあっている『文学』よりも、第三種人の『現代』よりも、遅れた作家を指導して前に歩かせている『文学雑誌』よりも、ずっと満足できる。我々の彼女に対する熱烈な擁護は一層厚いものとなる。熱烈に擁護すればこそ、我々は期待もし、批判もせざるをえない。……中略……論文はこの号においては、目下の文化闘争の状況の中心を把握しているものはないが、里正君が訳した「文学批評上の幾個問題」は目下差し迫って紹介の必要なものだ。我々は北方文壇に文化主義の陸緑曦と機械論者欧倫の論戦（另外一頁、世界日報の薔薇周刊、北平文化第四期）のあるのを知っているが、もしも彼らが里正訳のこの文章を読んだ後であったならば、自分で自分のほったを殴るようなことはなかったらう。

前衛氏が、『文芸月報』を「統一戦線上を整った歩調で前に向かって邁進する」とほぼ全面的に肯定する立場から、『文学雑誌』を「遅れた作家達を指導して前に歩かせている」と位置付けるのは、いかにも「左翼」ふうの露骨な表現ではあるが、おそらく彼としては「左翼」なりの極めて善意の受け止め方なのであろう。つまり、同じ戦線の中の任務分担の違いといったニュアンスさえ窺える。しかし、すぐその後で、文化主義と機械主義の争いとして陸緑曠と欧倫の論戦を指摘していることからみても、この二つの雑誌が単に左連の内部の役割分担といったものではすまなかった面があらわれてくる。陸緑曠とは、冒頭に紹介した陸万美の別名であり、陸が北方左連の指導者であり、『文学雑誌』の編集者であったと主張していることはすでに述べた。欧倫は、『文芸月報』の「読者通信」にすでに登場している。論争の舞台となった雑誌の一つ『北平文化』は北平文総の機関誌であり、前衛氏も「自分で自分のほったを殴る」というように、同じ戦線の中の論争ではあるが、かなり激しい論争があったらしい。いまは資料もなく、この論争の本身に立ち入る準備はないが、陸万美に対して「文化主義」と批判した人は、前衛氏の言う機械主義者欧倫だけではなかったことを明らかにしておこう。

批判者は、先程からたびたび登場している里正こと李正文である。前衛氏が称賛する「文学批評上の幾個問題」を訳しているのもほかならぬ彼自身なのである。その李が、組織からいわれて「文化至上主義批判」(傍点筆者)をしたというのである。彼は社連の活動を回想する文章のなかで次のように書いている。⁽²⁵⁾

当時、陸万美は革命宣伝を行うには、デモ行進をしたり白墨でスローガンを書くのを減らして、もっと文章や小説をたくさん書くべきだと提案したことがある。このため、当時陸万美の主張を「文化至上主義」とみなし

て、批判したことがある。当時、わたしは革命的情熱をもち、党のいうことならなんでもやったが、理論水準は低く、とても幼稚で、マルクス主義と左傾冒險主義の区別もつかず、そのため組織がわたしに「文化至上主義」批判の文章を書けというと、わたしはすこしも躊躇することなく書いて『北方文化』に発表した。

『北方文化』は恐らく前衛氏の引く『北平文化』のことであろう。李正文自身も言うように「王明の左傾冒險主義のため」に極左的偏向があったと反省する立場から書かれた今日の文章が、単純化されたり割り切り過ぎたりされることは、避けることのできないことかもしれない。「文化主義」といったものが具体的にどういう内容であったのかは、この文章だけから判断するのは妥当ではない。しかし、陸万美を批判することが、組織として行われたという点は重要であり、しかもここで文化主義といわれている内容は、陸万美が、それを契機として北平左連の方向が是正されたとする魯迅との会合で魯迅が語った点、すなわち、文芸作家の政治活動の問題で、やはり筆をもちいるのが主要な戦闘方法であること、に関わるのである。つまり、陸万美の言に従うならば、魯迅の北平ゆきを契機として変更されたつあった北平左連の方向の一つが批判されたことになるのである。

前稿でも書いたが、陸万美自身は、むしろ北平左連の方針の変更を、その創立者の一人であり、人望厚く影響力の大きかった潘漠華（潘訓）の指導部への参加と関連づけて描いていた。⁽²⁶⁾創立以来左連の指導に当たっていた潘訓が一九三二年に他の常任委員とともに左連の指導部を離れた。常任委員は党河北省委員会の副秘書長であった張秀中、革命互済会からきた柳風と左連に入って三、四ヶ月にしかならない陸万美によって引き継がれた。徹底的な改組であった。この常任委員会は政治的態度や情緒がいっそう先鋭激烈になった。其の後一〇月にさらに改組され、こんどは女子

師範大学の学生陳碧愈と中国大学学生の李某と残った陸万美によって担われることになった。魯迅が北平に來たのはこの頃である。陸はこの後すぐ文総の委員に拔擢され、上海に派遣されて北方の文化運動の報告をし、上海ではすでに反左傾閥門主義になっており、彼等とこの情況をよく話しあい、今後の連携をつよめることを確認して帰って來たのである。彼が北平に帰ってから、すなわち三三年三月以降、北平の文総と左連はまた改組され、潘訓は再び左連の書記として指導部に復帰したのである。その間の左連の活動は極めて先鋭激烈であり、こうした傾向と「閥門主義」の傾向を糾すのに魯迅の北平ゆきが大きな意味を持ったとしていた。この改組で王誌之が出版部、李某が組織部、そして文総から陸万美が戻り研究部の各責任者となった。『文学雜誌』の編集者といわれる王誌之、陸万美、潘訓は、その時いずれも左連の執行委員であつたのである。そして潘訓の指導のもとで左連の活動が順調に発展しようとしていた矢先に、当の潘訓が張家口の吉鴻昌將軍の抗日民主連軍に派遣されてしまつた。そして出發前に、潘訓はひそかに陸に向かつて、党内には彼が執行する政策は右傾化していると批判したものがいると言つたのである。陸万美はこの回想のなかでは自分に対する批判については語っていない。

李正文の批判が、というより組織が批判の対象としたものが、一人陸万美だけに向けられたものであつたかどうかは明らかでないが、潘訓に対しても、実は組織的処分がおこなわれたという証言がその後現れた。王誌之である。²⁷⁾

一九三三年の前半、小組の会で意見が分かれてしまつた。極左思潮の影響下で、潘訓同志は組織關係停止の処分を受け、党に対しては忠誠心に燃え敵との闘いでは勇ましく前進した戦士が、突然戦闘を停止させられてしまふ何もすることがなくなつてしまつたのである。その内心の苦悩が私にはよくわかつた。その時、私は命を受け

て平津文総代表として派遣され、張家口へ「華北民衆御侮救亡会代表大会」に参加しにいった。私は潘さんの同意を求め、組織の承認を得て、一九三三年六月、潘さんと私とそれに遠征（王誌之の妻＝筆者）は一緒に貨物列車に乗って北平を離れて察哈爾に行った。張家口についてからは我々は別別の部署に離されてしまった。

小組とは当時の北平左連の日常的な活動の単位組織である。王誌之は左連加盟以来潘訓と同じ小組に属していた。ここには師範大学関係のメンバーが多く集まっていた。当時の北平の活動は大学生が中心で、組織も大学毎に作られていたからである。しかし「組織関係の停止処分」とは、左連ではなく、党の組織であろう。或いは小組の会そのものが、党会議であったかもしれない。とすれば、党内の意見の分岐ということになるが、王誌之はそこを明確にしない、しかしいづれにしろ、こうして潘訓は北平を去り、王誌之も去り、谷万川が一人で『文学雑誌』の編集を続したのである。先に見た一期二期と三期・四期合刊号との編集方針の若干の変化は、こうした状況を反映していたのである。こうして、北方左連に起こりつつあった新しいスタイルの文化運動への脱皮の試みは、幕を閉じるのである。

『文学雑誌』三・四期合刊号に載った「批評家は知るべし」という投書は、こうした情況への危慮と忿まんを簡条書きに述べたものである。⁽²⁸⁾

大衆から離れた左傾のから騒ぎとなるなけれ。自分では前衛のつもりでいても、実際はごく少数の意見を代表するしかできず、孤立した理論家となってしまう……中略……聞けば左傾閥門主義はすでに打倒せられ、現在

はまた右傾の危険があるという。それで人々のなかには細めに開けたドアの後ろに隠れて、誰かが入ろうとでもしようものなら、不意にまず一太刀切り付け、傷を負わせて逃げ、首を半分だして後ろから呼び掛ける。「戻って来い。どうしてそんなに意気地がないんだ。」——實際これぞ顔つきを変えた関門主義であり、関門主義のやけぼっくに再び火が着いたといってもよいのだ。……中略……「理論は行動の指針であって、融通性のない教条ではない。」どうか我々の理論家たちには、機械的にソ連や日本の理論を無理やりに移植したり、でたらめに応用しないでもらいたい。——理論は当然「一般性」があるものだが、しかしその「特殊性」をまったく疎略にすることがあるとそれは「張の冠、李にかぶせる」(相手を間違える)ことになる。

こうして運動の中心は「関門主義」克服から「右傾化」批判へと流れが変わり、運動は再び先鋭化を強める。そして蔣介石直系の憲兵第三団が北平に派遣されてきたことと相まって組織は次々に破壊されていく。いまそのいちいちを書き留める余裕はないが、たとえば『文学雑誌』の関係者にかぎってみても、劇連書記の裏切りにより左連と左翼文化団体が大打撃を受けた事件で、陸万美も谷万川も逮捕されてしまったという。⁽²⁹⁾『文学雑誌』は完全に息の根を止められてしまったのである。

『文芸月報』はどうかといえば、七月に二期を発行したあと三か月の空白をおいて、十一月にようやく第三期を出した。編集者は文芸月報社から陳北鷗と金谷の二人の名に変わっているが、金谷は架空の名前に過ぎず、陳北鷗はすでに北平を脱出していた。最後の「編集雑誌」では「これまで文芸月報社が編集者となってきたが、実は二、三人で担当してきたに過ぎない。第四期からは金谷氏による個人編集とすることに決定した。また第四期からは必ず定期に

発行する」とあり、第四期の内容予告をだしながらもついに停刊してしまった。公開の発行をほぼあきらめ、ふたたび非合法での発行を試みたものと思われるが、情況はそれさえ許さないほどに悪化していたのである。こうして左連独自の運動は殆ど消滅してしまった。北方左連の再建は、一九三五年の末になってからのことである。

あとがき

本稿は北方左連における閥門主義の克服の動きを中心にとどめてみた。ここでは扱わなかったが、この時期には、左連関係の定期刊行物は『科学新聞』など多数発行され、左連の活動が実に活況を帯びていた。そしてそれらが急速に消滅していったのである。この隆盛はやはり、左連の方針の変更と関連させて考えるべきであると私は考えている。ただ、運動の消滅の原因については、左連の再度の方針転換によるものであったとばかり断言するわけにはいかない。いかなる形態の運動をも許さない政治情況の変化、とりわけ北平の治安担当が張学良から蔣介石直系蔣孝先の憲兵第三団に代わったことが大きかったからである。もちろん、そうした情況の変化は正しく運動の方針に反映されるべきであったが、実際は逆の方向に方針変更されてしまったことは以上述べて来たとおりである。

左連の活動全体が、李立三路線や王明路線の影響を受けて極左的な偏向をともなったといわれるが、とはいえ、そうした活動を実践するなかで、その実践を支えた人々のなかから、そうした運動への反省や批判がうまれてきたことをこれらの事実は伝えている。潘訓や王誌之や陸万美自身の文学的素質からこれらを説明する方法もないわけではないし、当然そうした資質の差が存在するのであるが、彼らも最初は極左的といわれる運動を受け入れ実践しているわ

けで、彼ら自身もそうせざるを得ないと感じる情況はたしかにあったのである。そうした運動にならざるを得ない必然的情況といったものについての目配りも必要であろう。たとえば、運動の主体が学生であった北平の運動では、魯迅の言ったという「文芸作家の政治活動への参加は」「やはり筆を用いるべき」という言葉も、彼等の実感となるまでには至らなかつたであらうことは想像に難くない。

にもかかわらず、上海での閥門主義の克服の動きや魯迅の北平行きを契機とし、それを頼みとして北平の左連の方針が転換されたのは、筆でものを書くことを自分の使命と考えた人々がおり、周りのそういう人々と連帯しなければならぬという考えが運動として結実したこと、これは北方左連の運動があくまでも文学者の運動であつたことの証左である。

これに対して、北平社連の場合は、客観的にみれば、そうした動きに冷淡であり、イデオロギー闘争の正統を錦の御旗として、ついには「右傾化」批判の主力部隊として、左連の活動を再び引き戻す役割を果たしたといえよう。文総が各団体の代表によって構成されていたとはいえ、活動に参加して二、三年にしかならない青年によって指導され、しかも指導と被指導の關係によって左連の上位にいたこと、そしてその文総の理論活動が社連の活動家によって担われたことで、左連の折角の運動の蓄積と、そのなかから得た貴重な経験の果実を無造作に投げ捨てることになつたというのが現在の私の判断である。こうした視点はひとり北方左連だけにしか適用できないのであるかどうか、もしかしたら上海の左連にも以通つた情況があつたのではあるまいか、という思いも強い。たとえば、魯迅の「辱罵と恐喝は闘争ではない」に激しく抗議した青年達の文章が載つた『現代文化』という雑誌の性格についても、現在では社連の機関誌であつたとされていることなどを考えると、左連を研究する場合にも、社連の運動との関連性についての目配

りも必要であると思うようになった次第である。(一九八七、九、二一 脱稿)

1 王誌之「憶『北方左連』」(『新文学史料』第四輯)に王誌之がその時逮捕されたことが回想されている。

2 茅盾・魯迅共編「中国左翼文芸定期刊編目」(『草鞋脚』一九八一年湖南人民出版社)は、『文学雑誌』の項で、「五月第二期被禁」とあり、第三・四期について言及していない。この目録は、茅盾が執筆し、魯迅が手を入れたとされているが、二期が発禁処分を受けたことが事実とすれば、立て直しに時間がかかったのはうなづけることである。

3 汪金丁によれば、彼はもともと北平にいて、陸万美から北方左連の活動に誘われたこともあったが、『文学新聞』の読者であったことから丁玲と文通があり、上海に移って左連の活動を始めた。三二年末か三三年初めに彼は十一人の左連執行委員に選ばれた。他に艾蕪も執行委員の一人である。金丁「有関左連的一些回憶」(『新文学史料』一九八〇年第一期)

4 『文学雑誌』の停刊の理由については、回想記の間にそれほどの違いはない。ここにまとめたのは、陸万美「迎着敵人的刺刀堅持戰鬥的北平左連」(一九七九年七月執筆、『中国現代文学研究叢刊』一九八〇年一輯、『左連回憶錄下』)である。他に、張松如「左連盟員談左連」(『中国現代文芸資料叢刊6』)があり、直接には谷万川の逮捕が原因となったと考えられる。

5 王誌之の友人である朝鮮人の金湛然が張天翼の作品をエスペラントに翻訳しようとし、王誌之が金の依頼を魯迅に伝えた。魯迅は張天翼の了解を取り付けると同時に、張天翼から「小伝」を受け取り王誌之に転送している。「私の幼年時代」がこの小伝であると直ちに断言することはできないが、現在まで他に張天翼の「小伝」が発見されていないことから、同一物である可能性も考えられる。

6 魯迅日記の一九三三年だけみても、『文学雑誌』関係の記載は次のとおりである。

一月五日、王誌之より手紙。

一月九日、王誌之に手紙と原稿。

『文学雑誌』と『文芸月報』

二月一日、張天翼より短い自伝原稿。

二月二日、王誌之より手紙。

二月三日、王誌之に手紙と張天翼の自伝。

四月三日、王誌之より手紙。

四月二八日、王誌之、谷万川より手紙と『文学雑誌』二冊。

五月二日、王誌之に手紙と二十元。

五月九日、季弗、静農、誌之らにそれぞれ本を送る。

五月一〇日、誌之より手紙、すぐ返信。

六月二日、王誌之の落花集の校閲を終わる。

六月一〇日、谷万川より手紙。王誌之に返信。

六月二日、『文芸月報』一冊を受けとる。

六月二日、谷万川に返信。

六月一三日、誌之らに『やくざなアンドロン』四冊送る。

六月二〇日、谷万川に手紙と原稿。

六月二五日、王誌之より手紙。

六月二六日、谷万川より手紙。

六月二七日、王誌之に手紙と『阿地書』一冊。

六月三〇日、谷万川より手紙。

七月五日、王誌之より手紙。

八月一日、誌之より手紙。

7 陸万美「追記魯迅先生『北平五講』前後」(『憶魯迅』一九五六年、人民文学出版社)

一九五一年八月二十九日昆明にて執筆、五六年六月九日修正。

一九七八年八月修正、『魯迅回憶錄二集』に収める。

陸万美には他に「兩届『北平文総』的一些情況」(一九七九年四月二三日執筆、『新文学史料』第四輯、『左連回憶錄下』に収む)、「迎着敵人的刺刀堅持戰鬥的北平左連」(一九七九年七月執筆、『中国現代文学研究叢刊』一九八〇年一輯、『左連回憶錄下』があるが、いずれも後に『雋永的憶念』(一九八一年、雲南人民出版社)に収める。

8 朱正は一九三一年生まれ、湖南長沙出身の魯迅研究家である。新版の『魯迅全集』の編集にも携わっている。彼は、五六年に作家出版社から『魯迅伝略』を上梓しているが、五七年に右派分子とされ、新聞記者の職を解かれたあと、肉体労働のなかで、魯迅研究を継続した。七九年名誉回復後、湖南人民出版社の編集者となり、復帰して最初の仕事である『魯迅回憶錄正誤』(一九七九年一〇月、湖南人民出版社)を世に問うたが、そのなかの次の各章で陸万美の証言に疑問を呈しているのである。^(補注)

「魯迅一九三二年的北京之行是為了什麼？」

「關於『北平五講』」

「『文学雜誌』是北平左連辦的麼？」

9 含沙『魯迅印象記』(一九三六年十一月、上海金湯書店)魯迅逝去の直後その死に触発されて書かれ出版されたこの本は、出版直後発売禁処分^(注)に遭っている。張克明「第二時国内革命戦争時期国民党政府查禁書刊編目(一九二七・八——一九三七・六)」「『出版史料』3」参照。あまり流布されていなかったが、朱正の協力も得て、一九八〇年、四川人民出版社から改定版がだされた。

10 張永年は別に張松如ともいい、筆名に公木、木農、四名、章濤、張濤、席外恩、張松甫、魂玉などをもちいた。左連について

語ったものに「左連盟員談『左連』」(『中国現代文芸資料叢刊』6 一九八一、四)「対『左連成員名單』的回信」(『左連回憶錄』下一九八一、五)がある。これらによると、一九三〇年秋、北平師範大学で左連の活動に参加、以後左連師大小組に所属、谷万川、王守信、王誌之、鐘鳴宇、李樹藩、張志清、雷振武、李文保らと二人の中学教師賀凱、馬致千が同じ小組で活動したという。これらのなかに『文学雑誌』の執筆者が多くみられるのは興味深い。また『文学雑誌』について「この雑誌は一九三二年の冬に準備を始めた。魯迅先生の援助をいただき、原稿も承知していただいた。編集長は谷万川で、当時わたしは谷と同じ部屋にすんでいたもので、手分けして法商学院や医学院や中国大学の左連へ原稿依頼にいった。一九三三年、正式に発行された時には、わたしは北平を離れて山東へ教えにいっていた。一九三三年の夏休みに北平に戻ると、やはり谷と一緒に住み、共同して第三、四期合刊号を編集した。印刷に出したところでは私は再び山東に戻って来た。まもなく谷同志が捕まり、『文学雑誌』は停刊になった。この雑誌には編集委員会とか編集部といったものは無く、中心になったのは谷万川ただ一人であった。」と述べている。尚、「公木自伝」が『中国現代作家伝略』に、「公木伝略」が『新文学史料』一九八七年三期にある。

11 李文保「回憶魯迅在北平師範大学講演——一九三二年一月二七日」(『紀念魯迅誕辰百周年文学論集及魯迅珍藏有關北師大史料』北京師範大学中文系編 一九八一年五月 北京師範大学出版社)

12 王誌之の戯曲集『革命の前夜』は、一九二九年、上海大衆書局から発行され、『中国文学辭典』(現代第四分冊)によれば、後に発禁になったという。王誌之においては旧作に属するものだが、魯迅に会いに行くのに携えたくらいだから、やはり自信作だったのだろう。王誌之はこのほかに、三〇年にも短編小説集『血泪英雄』を北平東方書店から出版して、これも発禁になったという。魯迅に戯曲は門外漢であるといわれ、かわりに出版を依頼したのがこれで、その後魯迅は校訂して『落花集』として現代書局から出版しようと試みた。この本の出版に関してのことは、二月二日の魯迅の手紙に「小説は来年、書店に相談します」と返事があるので、早ければこの時、遅くとも二月一日には魯迅に手渡しているはずである。勘繰れば、王誌之のこの言葉は、魯迅に自分を売り込む面もあったのではなからうか。

13 陸万美は「迎着敵人的刺刀堅持戰鬪的『北平左連』」のなかで、王誌之について語ったなかに、「王は多幕話劇『革命的前夜』を書いたことがあるが、私は『活路戲劇』の角度から文章を書いて批評紹介したことがある」と書いているが、『活路』とは『普羅』の諧音であり左翼文学を支持する意味であったというが、これは彼が左連に入る前のことに属する。

14 王誌之には、「北方左連」に関して他に次のような回想がある。

「憶『北方左連』」（『新文学史料』第四輯一九七九年八月のち『魯迅印象記』一九八〇年四月、『左連回憶錄』下 一九八二年五月に収められる）

「魯迅致王誌之信注釈参考資料」（『魯迅研究年刊』一九七九、陝西人民出版社）

「入党前後」（『魯迅印象記』四川人民出版社版所収）

「懷念金湛然同志」（『魯迅印象記』四川人民出版社版所収）

「左連盟員談左連」（『中国現代文芸資料叢刊』第五輯 一九八〇年五月）

「魯迅先生到北師大演講」（『魯迅研究文叢』2 一九八〇年一月）

「日本人民同我在一起」（『人民日報』一九八二年八月九日）

「懷潘訓烈士」（『人民日報』一九八五年三月一八日）

「谷万川印象記」（『新文学史料』一九八五年一期）

15 『中国文学辞典』現代第四分冊（一九八五年、四川人民出版社）参照。

16 王誌之の許広平宛書簡は一九三六年一〇月二五日付。『魯迅、許広平所藏書信選』（周海嬰編、湖南文芸出版社、一九八七年一月）所収。

17 歌特「文芸戦線上的閥門主義」は、かつて前田利昭氏の「『第三種人』論争における馮雪峯——および『中間派』文学者をめぐって」（『東洋文化』五六号、一九七六年三月）の中で、第三種人論争における馮雪峯に影響を与えたものとして指摘さ

れている。その後、中国でも『新文学史料』一九八二年二期に再録され、程中原「党領導左翼文芸運動的重要史料——読歌特『文芸戦線上的関門主義』によって、この党中央の指導者によって書かれたこの文書が馮雪峯を初めその後の左翼文学運動に大きな影響をあたえたことが指摘された。その後、吉明学「歌特、科徳及其他」(『新文学史料』一九八三年二期)で『世界文化』二期の科徳論文とほぼ同じものであることが明らかにされた。さらに一九八五年発行の『張聞天選集』に収められて張聞天の筆になるものと確定された。

- 18 『世界文化』第二期は、文総の機関誌『文化月報』の第二期を改名したものであって、左連の機関誌で一期しかでなかった『世界文化』の続刊ではないことが、唐弢氏の「『世界文化』第一期」(『晦庵書話』一九八〇年九月、新華書店)によって考証されている。

- 19 陸万美「迎着敵人的刺刀堅持戰闘的『北平左連』」一九七九年七月執筆、『中国現代文学研究叢刊』八〇年第一輯及び『雋永的憶念』(一九八一年一月、雲南人民出版社)所収の文によった。他に「迎着敵人刺刀尖、堅持戰闘的『北平左連』」(『左連回憶錄』下)があり、一部異同があるが前稿で触れたので省略する。

- 20 王誌之「憶『北方左連』」『新文学史料』第四輯

ここで、王誌之は「党中央の『抗日民族統一戦線をうちたてよ』の呼び掛けに応えて、我々はたぶん一九三二年の秋に文芸茶話会を催した。当時知名の作家、教授に通知を出し、北海の五龍亭で集会をもった。当日呼び掛けに応えて来たのは、左連の同志のほかには、范文蘭、朱自清、鄭振鐸だけであった。我々はこの茶話会を催すために手分けして周作人、俞平伯、謝冰心を尋ねた。しかし彼等はいずれも来なかった。」と回想している。范文蘭はともかく鄭振鐸と朱自清は『文学雑誌』に書いているわけでこの会との関係があることは確かである。しかし、『魯迅印象記』のなかでは「文学雑誌社の友人達で『文芸茶話会』を發起した。我々はそれぞれの人と取り次ぎをしてくれる人もなく、ただ皆が知っている人達に参加の呼び掛けを送った。最初は北海の五龍亭で、来たのは鄭振鐸、朱自清と我々が過去には付き合いのなかった汎山の文学者達であった。……中

略……我々が『文学雑誌』のことを話すと鄭振鐸が不思議そうな顔で、彼等も一冊出そうとしていて、やはり『文学雑誌』という名だという。北平でやるのかと思ったら、上海で、我々が先にだすのである以上、彼が手紙を書いて名前を変えればいいと言った。」これが『文学』というわけである。とすれば、三二年秋というのは、早過ぎるので陸万美の説をとることにした。

21 川口浩『プロレタリア文学概論』一九三三年二月一日、白揚社発行。「はしがき」に獄中からの蔵原惟人の本書執筆の計画への賛意をしたためた手紙が引用され、「本書が同志蔵原の理論的成果を継承とした」旨が書かれている。なお、訳載された論文には、原文の掲載誌等が書かれておらず、独立した論文のごとく扱われている。本書の翻訳であることは、同書との照合によって確認した。和光大学教授祖父江昭二氏より所蔵の本書を借覧させていただいた。記して謝意を表する次第である。

22 李正文「關於北平社連の一些活動」、「中国社会科学作家連盟成立55周年紀年選輯」（一九八六年三月、上海社会科学院出版社）および『中国社会科学作家連盟史料選編』（一九八六年三月、中国展望出版社）に収む。前者には、李正文の「回憶我在北平社連的日子」および「中国社連老會員代表李正文同志在紀念大会上的講話（書面）」が掲載されている。

23 陳北鵬「回憶北平左連」、「中国現代文芸資料叢刊」第六輯（一九八一年四月、上海文芸出版社）なお陳北鵬の「回憶中国左翼作家連盟北平分盟的艱苦鬭爭」、「左連回憶錄」下）には、文芸月報社の設立の会の様子が書かれている。「文芸月報社は雑誌発行の前に文総と左連の指導下に司法部街華美西餐館で成立の会を開き、規約を採択し、執行委員を選出した。その時成立会に参加したのは『文芸月報』の創刊号に書いた何人かのほか、北方党と文総と左連の責任ある同志がいた」

24 『北平文化』については陳北鵬が「回憶中国左翼作家連盟北平分盟的艱苦鬭爭」のなかで回想している。当時彼は文総発行部の責任者であった。「これは北平文総の機関誌であつて文総が発した関係文書や宣言を専門に載せる内部刊行物で、一九三三年五月一日創刊された。……中略……出版部は内部文書と雑誌の出版に責任を負った。当時出版部は瑠璃廠西南園のある小さな印刷工場と秘密の印刷関係を作りあげた。『北平文化』はこの印刷工場で印刷されたもので、我々は原稿を直接工場の労働者に渡し、印刷工場の経営者を通さなかった。……中略……『北平文化』は文総発行部が発行した。文総発行部は文総と

文総の各加盟団体の刊行物だけでなく、すべての革命的宣伝品の発行も代わって発行した。」

25 李正文「關於北平社連的一些活動」

26 陸万美「迎着敵人的刺刀堅持戰鬪的『北平左連』」

27 王誌之「懷潘訓烈士」『人民日報』一九八五年三月一八日。

28 木農「批評家須知」は「通信」欄に掲載された。七月三〇日付。編者は「『有れば則ちこれを改め、無ければ則ちさらに勉む』という昔からの言葉で、あなたの七項目の提案に対する応えといたしますがどうでしょう? ——あなたが手紙を書かれた時はすこし『感情的』過ぎているとおもいますが」とコメントしている。木農は谷万川、王誌之と一緒に魯迅を訪問した張永年の筆名である。注10から明らかのように、この時彼は実質的には編集に携わっていたのである。張永年の「魯迅訪問記」が『文芸月報』に載ったことはすでに述べた。

29 陸万美「迎着敵人的刺刀堅持戰鬪的『北平左連』」

30 武克全、許敏、姜鳴、謝黎萍「三十年代中国思想文化戦線上的 一面戰鬪旗幟——中国社会科学家里連盟情况概述」『中国社会科学家里連盟成立55周年紀年選輯』（一九八六年三月、上海社会科学院出版社）

補注 新着の朱正著『魯迅回憶錄正誤』（一九八六年一月、人民文学出版社）は、再版とあるが実質は大きく改定されている。本稿であつかった『文学雜誌』是北平左連辦的麼?」の章は、表題が「關於『文学雜誌』的幾件事」と変えられて、北平左連の機関誌であつたことを疑う論点はすべて削除されたものとなった。が、なお王誌之の『魯迅印象記』への信頼は持続し、それによって二つの雑誌の傾向の分岐の存在を指摘している。せつかく両雑誌を見て書かれた（らしい）のに、分岐の内実に殆ど触れられていないのは残念であるが、それによって本稿の執筆の意義も減少しないことになった。